

2013 vol.27
The 35th general invitation

写真新世紀

NEW COSMOS OF PHOTOGRAPHY

Grand Prize

Yosuke HARADA

Excellence Award

Shingo KAKITA
Yohei KICHIRAKU
Robin HASEBA
Yuki HAMANAKA

Portfolio

Grand Prize 2011
Maya AKASHIKA
Grand Prize 1999
Takashi YASUMURA

写真で何ができるだろう？ 写真でしかできないことは何だろう？

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的としたキヤノンの文化支援プロジェクトとして1991年にスタートしました。作品のサイズや形式、年齢、国籍などを問わない公募形式のコンテストを実施し、写真の持っている新たな可能性を引き出す創作活動を奨励しています。

写真の誕生から170余年。デジタルカメラの普及などにより、今や誰もが気軽に写真を撮り、楽しむ時代となりました。絵画やイラストといった隣接ジャンルとも互いに影響を与え合い、写真表現の幅はより一層の広がりを見せています。写真を取り巻く環境が大きく変化していくなか、「写真で何ができるだろう？ 写真でしかできないことは何だろう？」を常に問い、写真界に新風を吹き込むクリエイターを応援してまいります。

「写真新世紀」は次世代の表現を切り拓く才能を発掘し、新人写真家が大いなる第一歩を踏み出すための「場」でありたい。私達はそう願っています。

canon.jp/scsa

CONTENTS

写真新世紀とは

- 02 2012年度(第35回公募)グランプリ受賞 原田 要介
- 10 2012年度(第35回公募)優秀賞 柿田 真吾
- 16 2012年度(第35回公募)優秀賞 吉楽 洋平
- 22 2012年度(第35回公募)優秀賞 長谷波 ロビン
- 28 2012年度(第35回公募)優秀賞 浜中 悠樹
- 34 佳作
- 44 総評 審査員プロフィール
- 46 2011年度(第34回公募)グランプリ受賞 赤鹿 麻耶
- 54 1999年度年間グランプリ受賞 安村 崇
- 61 写真新世紀の歩み
- 62 グランプリ選出公開審査会報告
- 64 第36回公募のお知らせ



2012年度(第35回公募)グランプリ受賞
原田 要介 *Yosuke HARADA*
「世界するもの」









原田 要介 *Yosuke HARADA*
「世界するもの」 World-Becoming Things

ファイル/大四切/カラープリント/58点

「世界するもの」というタイトルで、この作品をまとめましたが、これらは「世界するもの」というテーマのために撮られた写真というよりは、写真という行為を通して、被写体となったものや、人、風景、現象、出来事が「世界するもの」として現れ、そこに日常の世界とはまた別の特殊な場が立ち上がるといったものです。美術大学にいたこともあって絵を描くこともしてきましたのですが、「写真の見る」と、「絵の見る」では、行為者の感覚としては、大きく違う部分があります。絵という行為では、視覚を凝縮してビームのように送りながら、見るという意識を対象に集中させていきます。作業を積み重ねていく中で、そこに自分の中に何かしら塊として現れてくることを求めています。それに対して、写真という行為では、視覚はその場に浸透、拡散されていき、そこから見ている自分になっていくように感じています。作品に写っているのは、私の意思とは関係なくそこにあるものが、ただ自分を通して外に現れてきたものであり、自分の中から出てくるものはあまり込めきれない気がしています。自分は見るということの媒介者でしかないため、多くを対象に委ねなければならず、縁があってそこに居合わせることでできたという感覚の方が強いです。ぼろりと現実からこぼれ落ちては、見るということを宙ぶらりんにするもの。それを求めて自分を空気に溶かして、意識がそこになじむのを待っています。今、この絶対的な瞬間を捉まえたいのではなく、その場を時間の軸から切り離して、ある程度の長さを持ったタームとしての時間の中で、見ているこちらと見られているそちらが聞きあいを始めます。距離を測りあぐねて意識が行き来するうちに、私と対象が混じり合う中間の場のようなものが発生しま

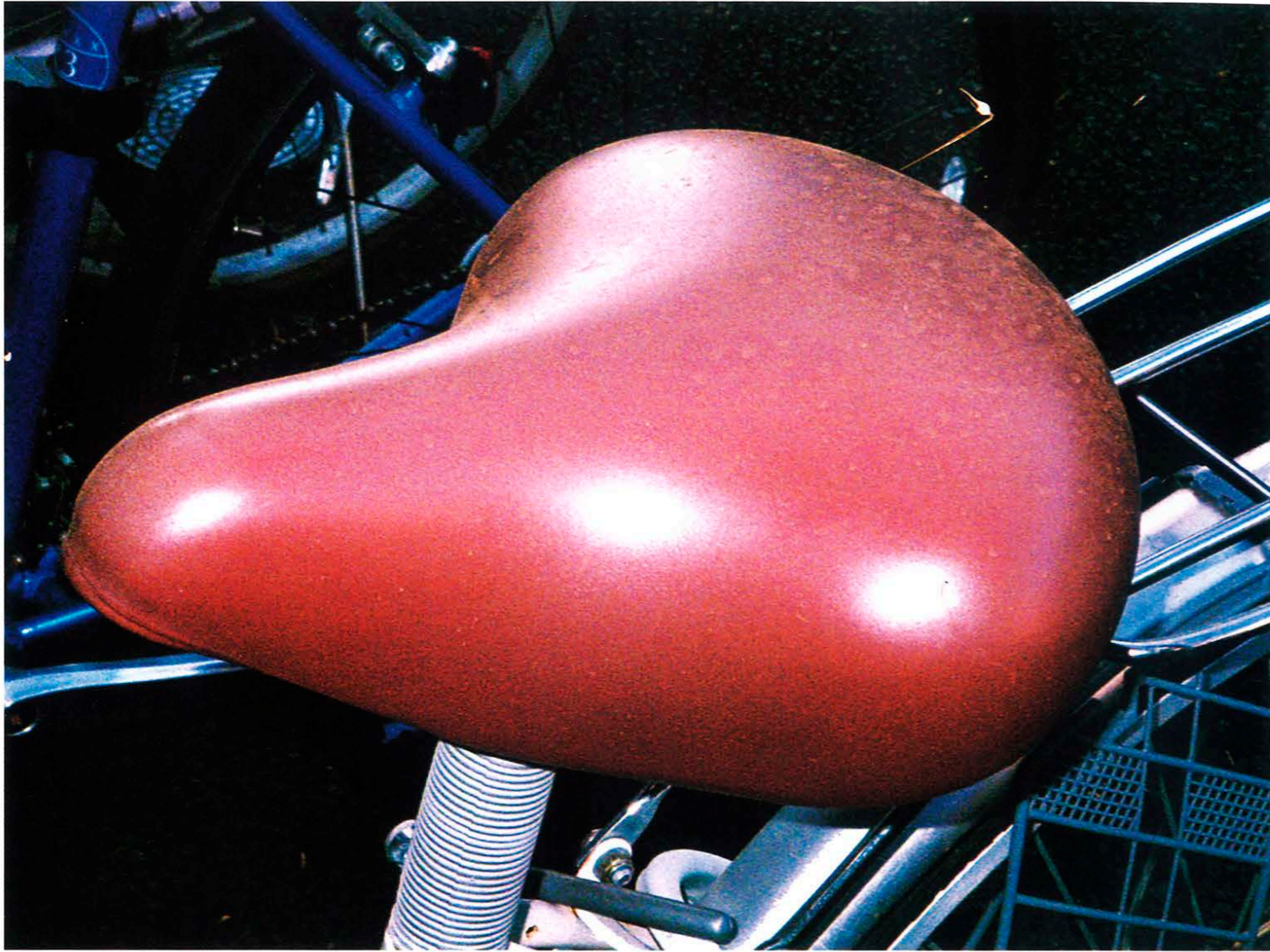
選：清水 穰

写真としてオーソドックスに優れているものを優秀賞にしました。タイトルは「Die Welt weltet」というハイデガーの言葉だと思いますが、世界が励起してくる瞬間を写真で表現するというコンセプトがあるわけです。世界は単に静的に存在しているのではなく、「存在する」という動詞的な出来事なのだ、と。その瞬間とは、隙間からあるものが覗いていたり、見えていなかったものが存在を主張してくる瞬間であり、日常が動詞的な有り様へと転変する、その契機です。さらに存在感のある男性、正面から捉えた女性の肖像などがうまく区切りとして挿入され、写真集としても強い印象を残します。世界が通常の意味関連から脱落し「世界する」という事件として立ち上がってきたイメージを定着させるという、写真の基本の在り方を、うまく結実させているように感じました。よく対象を見て、力まずうまく写真として成立させていて、新しい才能の閃きと言うよりは、派手さはないけれども実力があるなという感じ。オーソドックスだけど、なかなかありません。

す。視覚が目の奥へと引っ込んで、頭の後ろから眺めているような感覚になります。そこに「ある」ということのそれ以上でもそれ以下でもないものを前に、対象へと向かう意識もいつの間にか抜かれてしまい、その何でもなさですっと引いて見えます。作品を前に、ただいつまでも見ていられるような、見る人が見るということの意識をなくして、ただ見るということに入り込めるようなものになっていればいいと思います。私は、基本的にあまのじゃくな性格のため、いろんなことを疑って見ているし、物事に対して斜に構えています。日常は堪え難い軽さと散漫さを伴って、膨大な新しらしさに溢れています。めまぐるしく更新されていく瞬間的な悦に身を任せて感覚が麻痺していくのを一時保留にして、自分の眼で、体験として、見るということをやりたいのです。写真という行為を通して、何でもない、ただの見るということに取り憑かれて、何もなし、何もなしと思いつつも、いろんなことを疑っては否定して、それでも最後には世界や自分をそのまま肯定してやりたいのだと思います。消費されていくイメージとしてのものではない写真や作品が、社会とどう関わっていくのか。写真とは、美術とは、作品とは、作るとは、見るとは何なのか。分かるという言葉を使うならば、正直、何も分かりません。考えれば考えるほど、もはや分かりたいのかも分からなくなってくるのですが、関わり続けていくしかないのだと思います。もう見るということからは逃れられないし、見るを志向することからも逃れられません。私はもっともっとたくましい眼を持って、いろんな見るを感知できるようになりたいです。



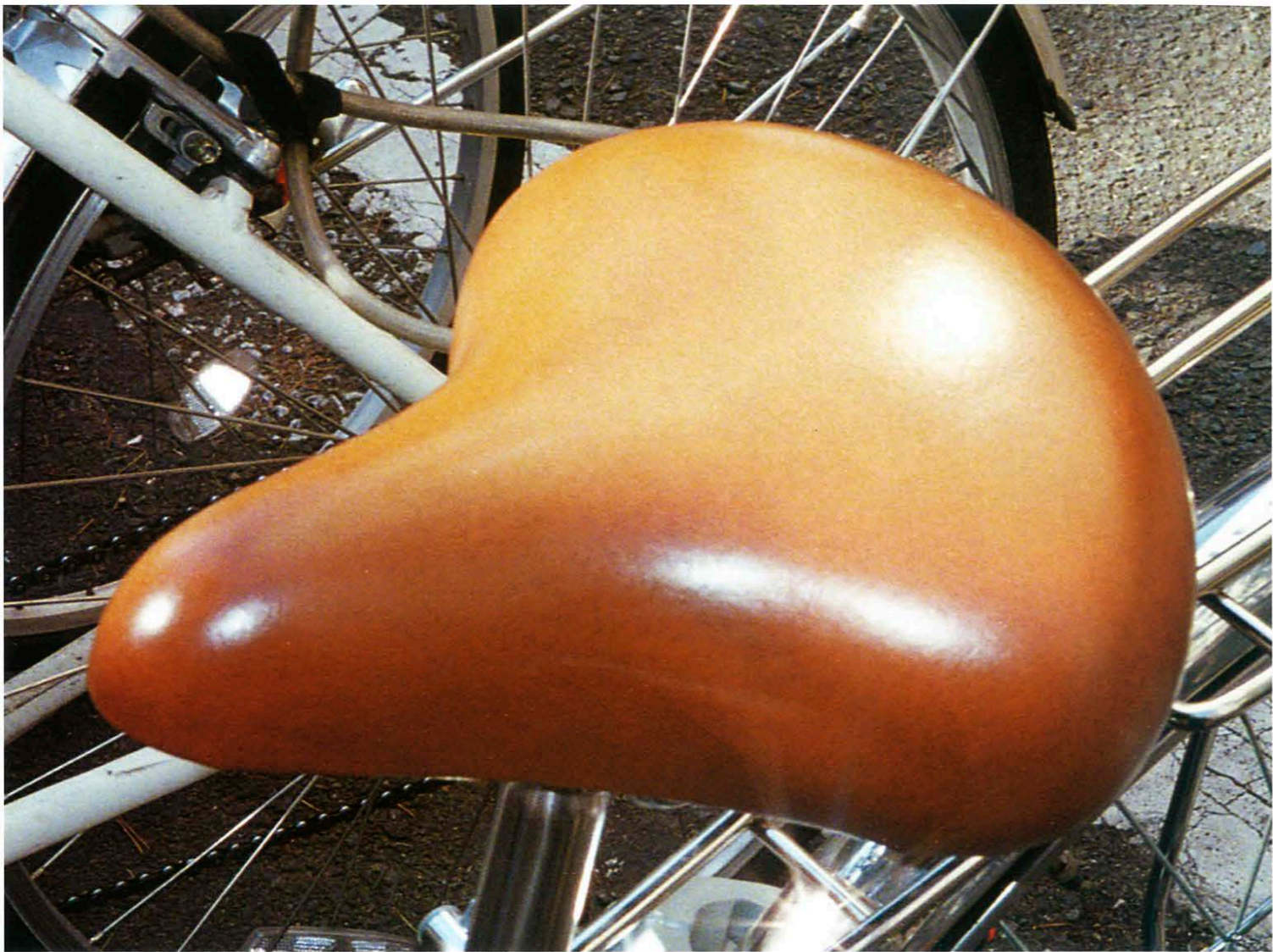
原田 要介
1982年 佐賀県生まれ
2007年
多摩美術大学美術学部
グラフィックデザイン学科卒業



2012年度(第35回公募)優秀賞

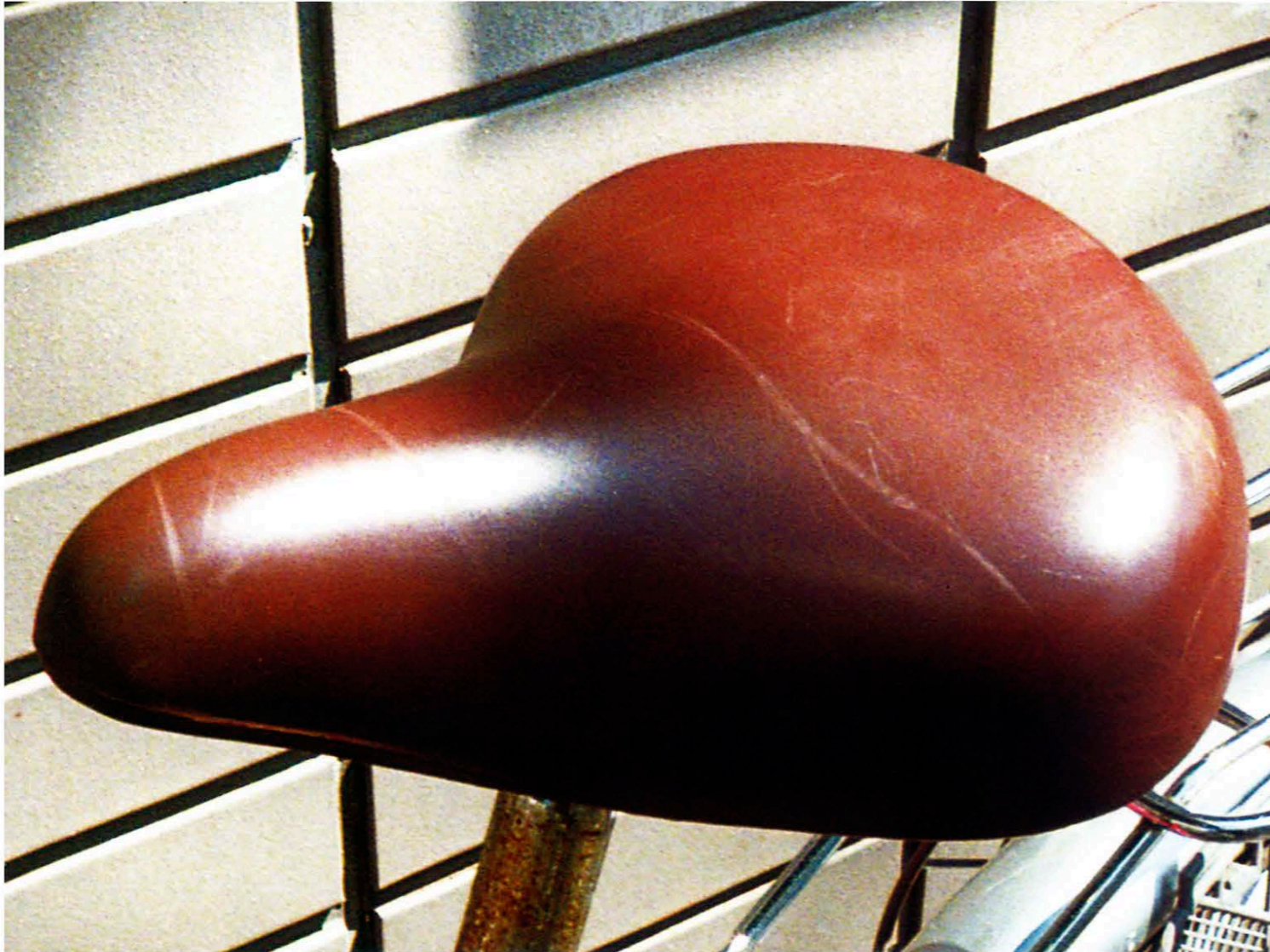
柿田 真吾 *Shingo KAKITA*

[forever acid]



柿田 真吾 *Shingo KAKITA* 「forever acid」

ブック/A4/インクジェットプリント/40点



自転車のサドルを撮影しました。制作のきっかけになったのは道ばたに置いてあるサドルが男性器に見えたからです。

サドルには股間が当たる。形もなんだかそのように見える。股ぐらを意識することにこの作品は重点を置いている。タイトルの「acid=酸っぱい」は股ぐらの臭いを喚起させるために冠した。パーソナルな壁を超えて人間の性的興奮や便意に股ぐらは反応する。それは根本的な生の実感ではないだろうか、とこの制作を思い立った。

撮影はコンパクトカメラにカラーネガフィルムを装填して手持ちで行ってる。最初は4×5やタイリングなどで精緻な描写を試みた。ウェストンのペッパーのように仕立てようと考えた。しかし冷静で絞りの深い画像はテクスチャーが際立ち過ぎ、サドルが目に入った瞬間に感じた衝撃のようなものが逃げてしまった。それに加えて色彩があるので一枚一枚がうるさい。もっとリズムを重視したかった。試行錯誤の後、コンパクトカメラを使用することにした。ピントの選択を放棄し直感的にスナップしながら街を歩いた。フィルムはスキャンにかけ、デスクトップ上でトリミングをして出力した。スナップをコラージュしてまとめた感じ。グリッチをかき集めたようなリズムをブックに持たせたかった。

サドルの淫猥なフォルムや質感に魅力を感じる。一番すてきな

はその辺にあるものであること。とても良いと思う。2時間くらい住宅街を散歩すればフィルム5本分くらい作品ができるから。カメラを持って、遠くに行きたくならないし、無理して行ってもクソみたいな写真しかできない。それはきっと近くを探そうとするせいだ。シチュエーションが定まったら、あとはカメラに身を任せる。脳みそを停止させてシャッターを押すマシンになっている感じがとても気持ちがいい。個がすり切れて無くなっていく感じがするから。

写真についてはあまり詳しくはないけれど、写真を見たときの感動は虫みみたいな首の無い生物に襲われてずたずたにされる気分だと思う。妖怪の野槌になす術も無く喰われる感じ。それが私にとって写真のもたらしてくれる心地よい心の顫動です。

一昨年前、佐渡島へ旅行したときに民宿で酔っぱらいのおっさんと仲良くなった。おっさんは昔日本で失敗して、長年東南アジアでブランド品のパチモンを売りながら逃亡していたらしい。写真をやっているという「誰もやってないことをやれ！中村征夫が正面から魚を撮ってるんなら、おまえは下斜めからえぐるように撮れ！」とおっさんは言った。とても素敵な言葉だと思った。たぶん魚は撮らないけれど。

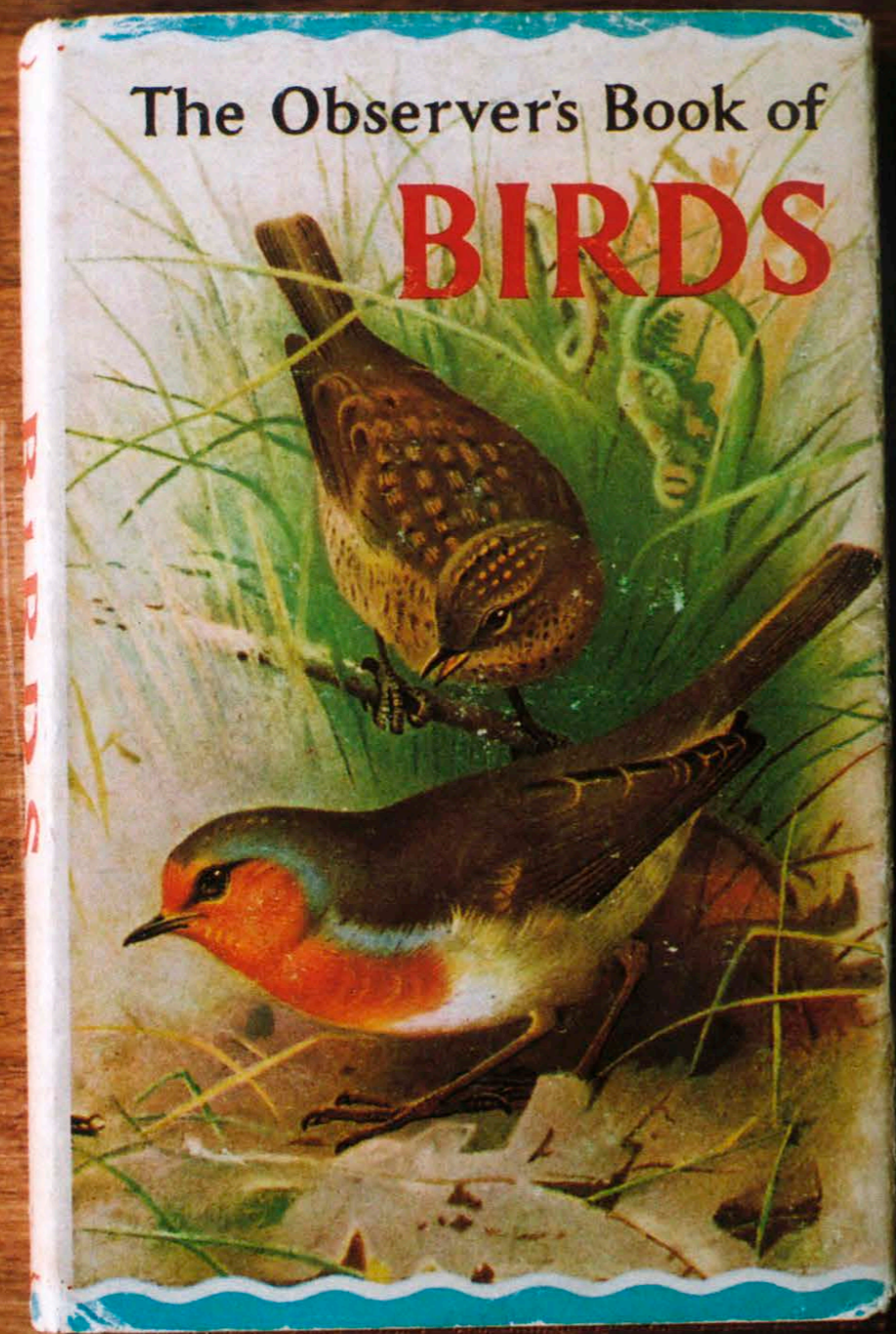
選：大森 克己

見たいものははっきりしていて、繊細で緻密に見えています。あと、緻密なんだけど、強さがあって趣味がいいですね。上品なスカトロロジー。今回、一番写真だなと思った作品です。

あと、不思議なことに何回も見たくなる。自分の眼差しを押しつけがましくなく見せている。ユーモアのセンスを感じます。不思議なモノ感があって、いろんなことを想像します。彼がいる場所とか我々のいる場所とか時間とか。サドルは、放置もあるしピカピカなモノもある。大げさにいうと世界の多様性みたいなものを感じてちょっとしたディテールがおもしろい。ただ単に収集されたものではなくイキイキしていて分量もいい。これからどんな写真を撮っていくか興味があります。若い写真家のスタートとして祝福したい写真です。



柿田 真吾
1989年4月3日生まれ
長崎県出身
武蔵野美術大学映像学科卒業



2012年度(第35回公募)優秀賞

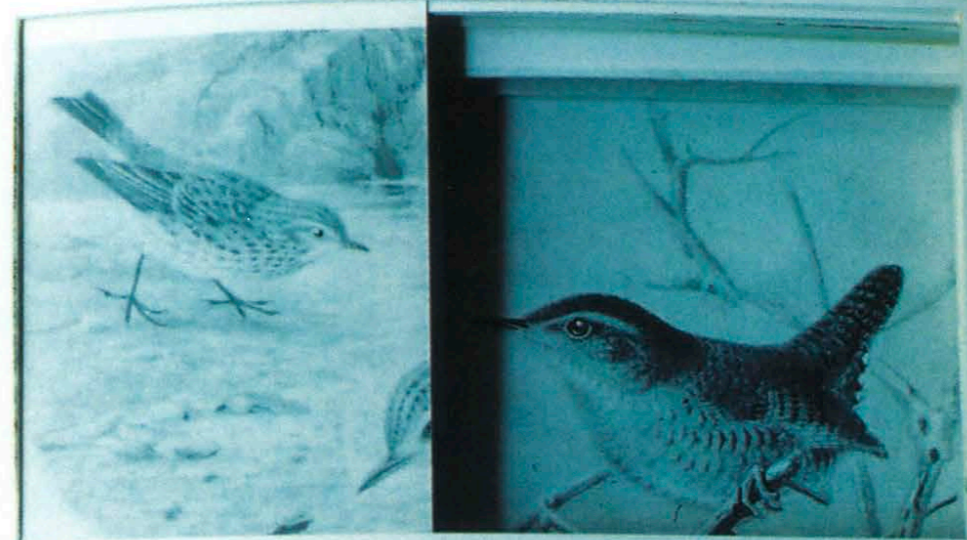
吉楽 洋平 *Yohei KICHIKURU*

「BIRDS」





Family *MOTACILLIDAE*. Wagtails and Pipits
MEADOW PIPIT or TITLARK Length $5\frac{3}{4}$ in.
Anthus pratensis Resident



This is a rather slim and dainty little brown and buff, striated bird, with the Wagtail family's distinctive and nimble run and walk. It does not hop.

HAUNT. Downs, moors and fields.

NEST. Of dried grass, lined with hair or wool ; on the ground, well hidden in grass or heather.

EGGS. 4 to 6, densely covered with grey-brown or chocolate speckles. April-June.

FOOD. Mostly insects and a small quantity of weed-seed.

NOTES. The noticeable alarm cry is "peep peep peep" ; there is also a quiet little note "tit" or "pipit" when walking daintily through the grass. Song : a repetition of "peep peep" as it mounts into the air, growing faster till it comes down again, wings stiffly spread and tail feathers with a clicking, whirring twitter, "pe-pe-pe-pe".

吉楽 洋平 Yohei KICHIRAKU 「BIRDS」

ブック/A4/カラーコピー /41点

私は普段の生活の中の些細な出来事や体験を元に作品を制作しています。

そこから生まれたイメージを形にすることが私にとっての作品制作です。私は作品の雛形であるこのイメージをとっても大切にしています。それは作品の設計図のような物で、制作を進める中で様々な判断をしていく上での基準になります。写真はイメージを目に見える形にするためのとても有効な手段だと思っています。また作品の元になるイメージが生まれる瞬間は偶然の要素が大きく関わってきます。偶然は私を日常から解放し、作品のインスピレーションを与えてくれます。

この作品もある日たまたま通りかかった蚤の市で、一冊の本を見つけた事がきっかけでした。そこで売られていたのは、ほとんどが食器等の生活雑貨だったのですが、その中になぜか一冊だけ本がまぎれていました。他に本は売られていなかったのですが、その本はすぐに私の目に留まりました。気になってその本を手にとってみると、それは一冊の小さな鳥の図鑑でした。図鑑とは言ってもとても古い本でしたので、鳥達は写真ではなく絵で描かれていました。表紙には2羽の鳥の絵が描かれていました。中のページを開いて本を眺めていると、あるページに手が止まりました。

そのページには鳥がいませんでした。本来鳥が描かれているはずの場所は切り抜かれ、そこだけ四角い窓のようになっていました。その窓からは次のページの鳥が顔を覗かせていました。私はそのページを見て不思議な感覚を覚えました。そこに本来描かれているはずの鳥はまるでこの本から飛び去ってしまったように感じました。他のページを探してみると、また同じように切り抜かれたページが見つかりました。残されたページは、私に鳥が飛び去った後の空っぽの鳥籠をイメージさせました。そしてあらためて本を見返してみると、その本自体がひとつの鳥籠の様に思えてきました。

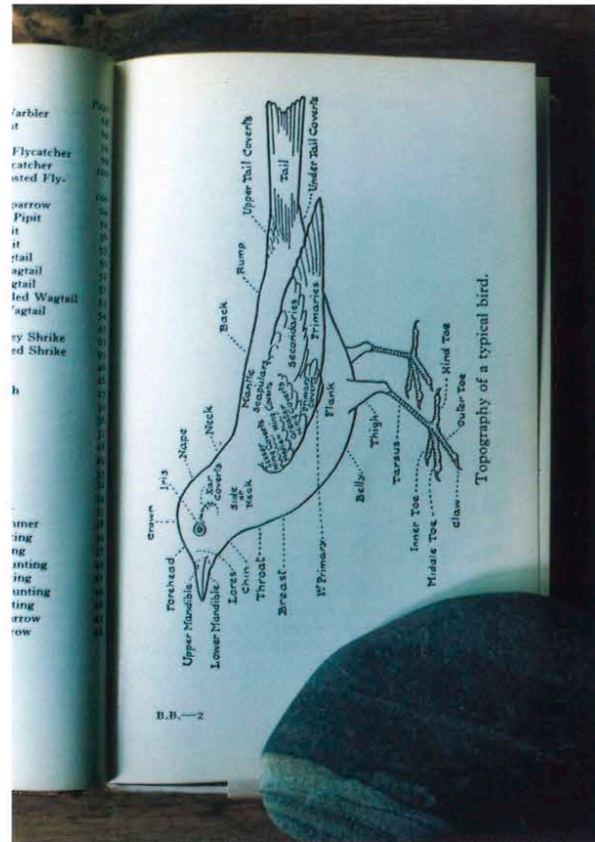
その切り抜かれたページはまるで前の持ち主から私への無言のメッセージの様でした。私は残りの鳥達もその本から解放する事は出来ないかと考えました。そこで自分なりの方法で本の中の鳥達を解放する方法を考えました。私は前の持ち主がやった様に本から鳥の絵を切り抜き、森に放ち、それを写真に撮って作品にすることにしました。私はその本を買い求め、まず鳥達を切り抜く作業から始めました。

絵を切り抜いたあと描かれている鳥のイメージに合う場所を探し撮影をしていきました。鳥達を撮影する場所はその絵に描かれていた背景の木々や植物を参考に決めて行きました。鳥達を森に放ち撮影を進めるうちに、鳥達の写真だけだと作品の世界感が小さくまとまってしまうような気がしてきました。そこで撮影している森の環境も撮影する事にし、作品の一部として加えることにしました。ある程度撮影が進んだ段階で、今度は一度ブックの形にまとめてみることにしました。ブックにする段階で元になった本をあらためて見返してみると、その本自体も被写体として魅力的であることに気が付きました。私はこの元になった本も重要だと考えていたので、それを複写し作品の一部として加える事にしました。

このような過程を経て、「森に放った鳥の写真」と「周りの森の環境」と「元になった本の複写」という3つの要素でこの作品を構成することにしました。

一度本という形になった鳥達の「絵」を、「写真」に置き換えることで、鳥達を新しいイメージとして解放することが出来たのではないかと考えています。

このように私は日常生活の中の小さな気付きや閃きを元に作品を制作しています。私が作品を制作するのは、頭の中にあるイメージを形にして人に見てもらうためです。頭の中に生まれたイメージを作品という形にして発表すること。それはちょうど鳥籠の中の鳥を森に放つ様な行為だと思っています。



選：佐内 正史

書物の一部(鳥)をカッターで切り取り、樹木の合間に置いている。それが手法に全く見えなくて、すごく素直に見える。この人はきっと写真家になりたいんだなあと思いました。緊張感があるんだけど閉じ込めてなくて、閉じ込めないように撮っている。鳥の影響かもしれません。キリッとしています。真ん中ちょっと上にピントがあっていてキレイです。ちょっとピュア。すごくいいと思う。



吉楽 洋平
1979年 新潟県生まれ
2002年 日本大学芸術学部写真学科卒業
2009年 ホンマタカシ「たのしい写真 よい子のための写真教室」参加
2011年 The Chelsea International Fine Art Competition 2011
写真新世紀(第34回公募)佳作受賞(佐内正史選)
写真新世紀東京展2011(東京都写真美術館)
2012年 個展「Quietude」@SLANT gallery

2012年度(第35回公募)優秀賞

長谷波 ロビン *Robin HASEBA*

「THE JAPANESE BEACH -SUMA-」







長谷波 ロビン Robin HASEBA 「THE JAPANESE BEACH -SUMA-」

ロール写真集 / 1344mm / インクジェットプリント / 105点

夏。ひと。ビーチ。笑い。個性。パワー。

おもわずツツコミたくなる写真。裏表のない性格の関西人。それぞれの個性を、同じ構図と画角で切り撮った。

1枚1枚の出会いに、人のつながりを感じた。僕なりのタイポロジー。人と人のつながりを一本のロール状で表現した。さまざまな個性をつなげる事で、「俺はここにいるんだ!」「私はここに生きている!」そういう、人が持つ人間のチカラというものを伝えたい。僕にとって写真は、理屈よりも、伝わっているかどうかが大事だと考える。

大阪で生まれ育った価値観。おもしろさにはカッコ良さが含まれている。「本当におもしろいものはカッコいいんだ!」自分のアイデンティティは、ここにあると思った。

僕が表現したい事、僕にしか撮れない写真とは。それは、「突き抜けている」写真だ。どこまでもポジティブに、人をハッピーな気持ちにさせる写真。人が人をもっと好きになれるような感覚を共有したいと思っている。これが、カメラマンを続けてきて築き上げた僕のスタンスである。

僕にとって撮影現場はライブそのもの。被写体と一つになる空気作り、雰囲気作りがいかに大切であるか。そうした僕のスタンスを、海のビーチで再現したのがこの作品である。

テーマは、ずばり「関西」。舞台は神戸須磨海水浴場。わずか3キロ余りの浜辺に夏の間だけで約80万人が集まる。

須磨ビーチは街の匂いがする。大阪から神戸まで、埋立地が続

く。海岸線のほとんどがコンクリート壁で隔てられている大阪湾だが、ようやくここ須磨で海と触れ合うことができる。人は真夏の海、ひと夏の出逢いを求めここに集まる。

関西人だらけのビーチ。そこは大阪の繁華街のようでもあり、関西の縮図。最新のファッションも流行の小物もほとんど意味を成さない裸の世界。しかしここに集う人々の体からは、匂い立つように個性があふれ出ている。着飾れないからこそ、むき出しの自己表現。

「街全体がボケとツツコミで形成されている」とまで言われる関西文化。海にいる人々を見ていると、みんながお笑い芸人のようだ。ビーチに白バックを立てると、そこはまさに笑い劇場。白バックがみんなのステージへと変わる。派手で目立ちたがりな、愛すべき関西人。40℃近い暑さに負けない、個々のセンスと突き抜けたパフォーマンス。

初対面とは思えないノリの良さ。そこから生まれるポジティブな光景。それが僕の撮りたい写真——。

朝から日が暮れるまで、特異のハイテンションな撮影スタイルで被写体と向き合い続けた。自分にしか撮れない突き抜けた写真だと感じた。

こんなにおもしろくて、かっこいいビーチ、関西にしかない。いや日本にしかない! 「THE JAPANESE BEACH -SUMA-」これが、僕のライフワーク。関西の夏、5年間。

選: 榎木 野衣

まず、被写体となる1人1人の楽しい表情やポーズがいいですね。見ただけで、こちらまで楽しくなってきます。見知らぬ人に声をかけて、全員に許可を得ているということで、かなり巧みなコミュニケーション能力があるし、作者と写されている人が一体となって、楽しんでいる様子が伝わってきます。屋外に白い幕を1枚垂らすだけで、海岸が仮設スタジオのようになり、室内に見立てられるわけですが、結果的に見るとビーチの方がセットのような、模型のようにも感じられてきます。そういう風景の異化があるのもおもしろい。タイトルとなっている須磨=SUMAは、関東でいうと湘南のようなところでしょうか、源氏物語などを引けば長い歴史のある場所、そこがお笑いのスペースのようになっている。そこから歴史の変遷まで読み込める作品になっています。それをひとつつながりの巻物の形態とすることで、まるごとひとつの季節をとらえている。ここからのさらなる展開も期待できそうです。



長谷波 ロビン
1977年 大阪府生まれ
関西大学社会学部在学中に吉本 NSC23期生として
芸人を志す。副賞で貰ったカメラで人物を撮り始め、
笑顔と空気感を残せる写真の魅力に惹き込まれていく。
1999年 フォトスタジオ入社
2003年 フリーランスで活動開始



2012年度(第35回公募)優秀賞

浜中 悠樹

Yuki HAMANAKA

きぎのよろずは

「樹々万葉」



浜中 悠樹 Yuki HAMANAKA

きぎのよろずは 「樹々万葉」 Life of Silence

ブック/A3/和紙(インクジェットプリント)/35点

本作品は、樹々が表現する幾何学的な形容の中に見られる「力強さ」「可憐さ」「儂さ」、新芽の生吹から枯園へと流れる、廻る命の「美しさ」を自分の感じた視点で「和」の表現を意識し、制作した作品となっています。

写真を通して「樹」という静かな生命体の千差万別な命のカタチを伝えられたらと作成しました。

まず、被写体に「樹」を選んだ理由としては、いつからか定かではありませんが、昔から「樹」が表現する生きた造形美に魅せられ、気になる「樹」があれば、日常から観察したり写真を撮るようになっていたことから、写真作品として表現するにあたって、自身の思考を投影しやすい、自分との距離が近い被写体であったというのがあります。

また、自分が見ている「樹」と、他の人が見ている「樹」の印象が一緒なのかどうなのかを疑問に思うようになっていたので、気になるポイントをカメラを通して切り取る作業を行うことで、そういった疑問に感じていた自分視点の可視化をすることもできるのではないかと好奇心もありました。

被写体を撮影し、作品へと仕上げていくにあたり「樹」の表面上の色彩や木肌といった情報の先にあると感じる、命のカタチを写し込みたいという考えがありました。

表現や強調するために用いたのは、冒頭でも少し触れている「和」のイメージとなっています。

「和」のイメージとして、日本人の美的表現としての「間」の感覚を作品制作に用いることで実現できるのではないかと考えたからです。

このような考えにいたった理由は、生まれ育った京都という土地柄が影響していると考えています。

古都であるが故に古来より日本で育まれて来た芸術表現である、生け花、日本画、水墨画、枯山水の庭園などが身近に多くあ

りました。

そういった作品に見うけられる空白とも思える、閲覧者がそれぞれ想像を静かに膨らます無の空間、独特の「間」に対して慣れ親しんでいる部分が多かったということもあり、普段から「樹」を見る時も周りの空間を意識していることからインスピレーションを受けて、この感覚が自身の思考を作品に投影する手段としても最適と感じての選択となりました。

撮影は、レンズを筆と見立て、開放値で濃淡の表現を行いつつ、イメージする「間」を用いた構図を決めるといった感覚での作業を1年を通して行いました。

1年という期間は、「樹」の春夏秋冬サイクルを追いかけ、様々な命の表情を取り入れることを目的として設定した期間です。

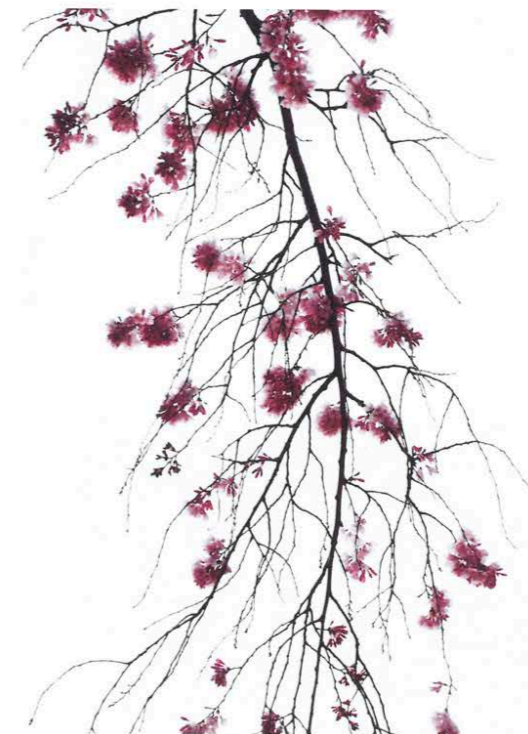
「間」を表現する空白部分において、印画紙自体から発せられる美術的な美しさも入れたいという考えと、静かな生命の力強さを引き立たせるにあたって、紙面にも表情があり、被写体の全体像を荒々しくも力強く、引き立たせられる印画紙を探した結果、今回は、インクジェットプリントが可能な伊勢和紙を選択させていただきました。

こういった経緯や拘りの元、完成したのが本作品となります。

自分にとって作品を創作することは、「自身の投影」を行うという考えが根本にあります。

そのため、制作前のコンセプト思案は、自身との対話を重要視しています。

カメラを使用した作品の創作を行うようになり、4年目を迎え、今回で2作目と経験値の浅さがありますが、知識が少ない状況だからこそ、見る・聞く・体験するをどん欲に行い、新たな表現の模索を行いながら、今後も自分自身との対話を繰り返して独自の作品を創作していけたらと思います。



選：ヒロミックス

まずは、美しいという印象が強くある作品です。時代を反映してか、どうしても写真が暗くなりがちな中で、純粋に美しいと思えるものを提示してもらうことにより、人々の気持ちが希望に繋がります。

写真と絵の中間のような、水墨画にも見えるのが良いです。

印象としては、人々がお部屋に飾りたくなりそう、癒されそう、趣味の良い若者から年配の方達と幅広く愛されそうな作品、という感じです。

日本ので東洋的な美の要素が選考の決め手です。



浜中 悠樹
1978年 京都府生まれ
2001年 阪南大学経営情報学部経営情報学科卒業
2009年 写真表現大学本科受講
2010年 ミオ写真奨励賞2010入選
2011年 写真表現大学 研究ゼミ受講
2012年 個展「植物視点」(Port Gallery T/ 大阪)
本業は、Webコンテンツ制作に従事。
その傍ら、写真作品制作を行っている。



呉 進一 Jinnil OH

「untitled」

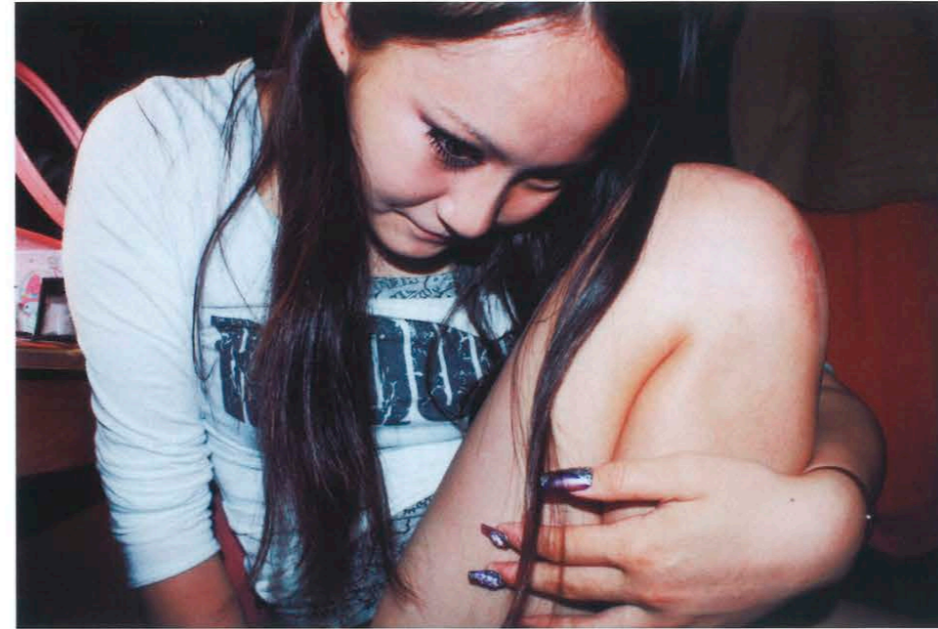
ブック/四切/インクジェットプリント/19点

作者コメント

ずっと人物ばかりを撮影しています。自分の意図や想像をかけ離れたような美しい瞬間が、1日に何千枚も撮影可能なデジタルカメラのメモリーカードに残っていてほしいと願いながら撮影しています。

選評

人間の無意識な姿が単純におもしろい。それを直球でつかまえているところがいいと思います。UNTITLEDというのは、意味があるのか投げやりののか、それがちゃんと原語化できれば、もっと見えてくるような気がします。



横岡 茉奈美 Manami MAKIOKA

「Marionette」

ブック/A4/インクジェットプリント/71点

作者コメント

写真の中の私は学校に行き、友達と笑い、遊び、毎日充実しているかのように見えるがその一方では、今にも悩みに押し潰されそうな毎日。偽りの笑顔で過ごし本当の姿は見せれない毎日。偽りの仮面を被っている私。そう、marionette。



鈴木 紀博 Norihiro SUZUKI

「たまむし」

ブック/大四切/インクジェットプリント/29点

作者コメント

群集から離れ、外から客体的に、そして鳥瞰的に街を眺めたかった。そのとき、いつもの街の表情が変わる。街の表情の変化が撮りたかった。

選評

人がいっぱい写っているのがいいですね。編集がちょっと甘いというか、量が少ないように感じました。もっとたくさん撮って、完成度を上げてほしい。今僕らが住んでいる世界がしっかり写っているような感じがしてそこがいいと思います。



長渡 千佳 Chika NAGATO

「How far are you?」

ブック/A4/インクジェットプリント/58点

作者コメント

私の内面を表した作品で成長していく感情を描いた作品です。タイトルの「How far are you?」とは被写体や自分の作品を評価してくれる人との距離「どれくらいの距離だろうか?」といった意味があります。人は決して一人で生きていくことはできない、だから生きている実感がほしいものです。私はその感情、距離感、孤独感、そういったものを伝える作品をつくりました。

選評

彼女たち、それぞれのブックの中に散りばめられている写真には、現代的なアイコンがあります。興味を感じてそれを撮っているのがわかります。楽しいとは思いますがそうじゃない他の写真に、おもしろいものがありました。それから、同じ被写体の子を撮っているというようなことも含めて、共同で撮る、一人で撮らなくてもそういうやり方があっていいとも思います。写真は最終的には一人だけど、自分のやりたいことをもっと二人とも勉強してほしいと思います。



阿部 祐己 Yuki ABE

「Halo」

ブック/A2/インクジェットプリント/20点

作者コメント

珊瑚のような森、人工衛星のような建築物、色鮮やかに身を包む人々。凍りついた世界で結晶のひとつひとつが煌々と燃える星々のように輝く。大きく、冷たく、全てを包み込む白い雪雲。遠い星々の存在を、雪上の銀河の中に感じた。

選評

部屋に閉じこもらず、ドアを開けて外へ出て行っている。正面から捕えて、少し上向きで、このバランスが写真家になりたいんじゃないかと思わせる。カメラと本人が一体化していないと伝わってこない感じがあって、気持ちがいい。キラキラしている。



鈴木 直弥 Naoya SUZUKI

「無題」

ブック/A3/インクジェットプリント/32点

作者コメント

日々、色んなことを考える。
おもにスケベな事とか。
実用性には欠けていた。
ここ何年かで撮った写真たちです。
次はもうちょっと明るいやつを撮るぞ〜!

選評

キラキラ光る反射するものをよく見て撮っていてとても気持ちがいい。偶然のようにサラッとしていて、みずみずしくてキレイです。気持ちがいいと思って選びました。



蕭 又滋 Aaron HSIAO

「列車プロジェクト- 連結」

ブック/1冊

作者コメント

列車プロジェクトを作ったきっかけは、人間の最もリラックスした無意識の表情と姿を撮りたいと思ったからです。しかし電車の中の大勢の乗客はお互いの動きや表情に相似性を見出し注意を払っているように思いました。確かに人間の心の底には他人と強く連結したいという意識が隠れていると思います。

選評

難しい撮影をしているのにそれがテクニックではなく、自然な感じで見れるのがいいですね。窓が横長で、それをちゃんと真横から真っすぐ見て撮っている。コンセプトがあるのに素直に見えてくるいい写真です。



谷本 恵 Megumi TANIMOTO

「大阪式」

ブック/ 大四切 / Cプリント / 30ページ

作者コメント

大阪を出て6年も経つと目を疑うような光景に出くわす様になった。どうやら「大阪メガネ」を無くしたらしい。そこに住まう人々が滲ませる、「かまへん(構わない)気風」がアチコチで顔を覗かせている。可笑しみ溢れる町の息吹を感じて頂けると幸いです。

選評

元気があって、楽しい感じが凄くします。それから、ただ楽しいという感じじゃなくて、カチッとしている部分もあって、広がりを感じる写真です。この人も写真やりたいんだなあというのが伝わってくる写真です。

2012年度(第35回公募)佳作受賞作品

選: 榎木 野衣



高木 みゆ Miyu TAKAKI

「しょもない私の十代が終わりました。」

ブック/A4:99点/A3:10点/インクジェットプリント(フィルムをスキャニング)

作者コメント

私にとって大人になるということは悪であり、恐怖でもありました。どうにかして私の十代を記憶に残そうと、二十歳の誕生日までの百日間を24枚撮りカラーフィルムで1日1本撮影しました。

選評

日常の一コマコマを切り取っているように見える作品ですが、ただ撮るだけに留まらず、きちんと伝えるための形式を作っている。自分が20歳になる100日前から1日24枚撮りを1本ずつ撮って、19歳から20歳へのカウントダウンをしていくわけです。ありがちな「私写真」に留まらず、この人なりの方法が込められていて、人生に一度しかない移り変わりのときをどう切り取るか考えて作っている。その点を評価します。



エリザベス 宮地 Elizabeth MIYAJI

「大人のままと。」

ブック/A4/インクジェットプリント/136点

作者コメント

2010年春、生まれてはじめて恋人ができた僕は、3年間同棲した「みなみ」と別れました。最後の思い出にと、最後のデートを写真集にしました。撮影の2週間後、朝方の海岸でみなみを燃やしました。

選評

24歳のときに初めて彼女ができた。それまでの3年間を一緒に暮らしてきた人形の「みなみちゃん」との別れを映画仕立てのように撮っていますが、ことはかなり複雑です。そもそも、これは本当の事なのか? 写っている男性が作者なのか? 撮っているのは誰なのか? といういろいろ考えさせられる。フィクションと現実との狭間で想像がいろいろ揺れ、解きほぐすのが難しいパズルのようでもある。映画と写真の間をうまく突いている点からも佳作にふさわしいと思います。



木山 恵莉 Eri KIYAMA

「PSYCHE プシュケ」

額装/B1/インクジェットプリント(絹目調)/8点

作者コメント

髪は本来の役割を越えてシンボリックなイメージを持つ。それは生や美、死や不気味などさまざまなギャップに私は惹かれた。

選評

女性の美の象徴として長く語られてきた髪の毛。日々伸びており、齢を重ねれば白くなったり抜けたりもする。自分の意識の及ばない領域で、人間の意志ではコントロールできない無意識の世界を反映しているのが髪の毛です。そこに不気味で同じく伺い知れない存在である虫たちがとり付いている。髪の毛の持っている非人間的で謎めいた部分を、写真を通じてうまく浮かび上がらせていると思います。



繁野 公一 Koichi SHIGENO

「rhythmos」

ブック/A3/インクジェットプリント/35点

作者コメント

テクノロジーの進化によって、今まで気づかなかったもの・見えなかったものが、目に留まるようになったと感じています。この作品は10年以上利用している地下鉄の駅構内で、空気の澄んだ時節に撮影しました。

選評

地下鉄の駅の構内を撮った作品ですが、日常とも非日常ともつかない、超現実的な世界をドライに切り取っています。よく考えると相当工夫しないと写せない風景で、撮るための準備がどうだったかも含めて興味深い。自分が毎日行き来しているところが、一転して未知の世界への入り口に変貌するかのようで刺激を受けました。



石川 竜一 *Ryuichi ISHIKAWA*
「okinawan portraits」

ブック3冊/四切/インクジェットプリント/332点

作者コメント

私はこの島で生まれ育ち、そのほんの20年余だけでも、この島の多くのことが変化してきました。そのなかでこの島の人の内で変わらないものとは何なのか。表面的なイメージを超えて、沖縄の持つ「何か」を探しています。

選評

吉永マサユキ+ダイアン・アーバス÷2、あるいは東北ならぬ沖縄の田附勝。正方形に依存しているところなど、まだオリジナリティがあるとは言えませんが、被写体が魅力的で人間図鑑として面白い、そう撮れているのは作家の才能です。良い目で良い被写体を選んでる。だから今度は写真として、他と違う自分のスタイルを開拓してほしい。すごく楽しかったです。



高島 空太 *Kuta TAKASHIMA*
「ざわつき」

ブック/B4/インクジェットプリント/33点

作者コメント

世界が在るのかわからない。それは自分自身を認識することもできず曖昧性、不安に包まれる。しかしその中でそれらを感じない瞬間がある。その瞬間を「ざわつき」と私は呼んでいる。終わったそれらが内と外との対面へと導く。

選評

サンドバースト効果というのか、砂粒状の荒れた感じを徹底的にやり通したという点に潔さを感じました。なかなか魅力的に仕上がっていて、写真が上手だと思います。ただ、このエフェクトを取ってしまった場合、どういう写真を撮れるのかというところが気になります。一つの美意識を貫いたということで、次に期待したいですね。



黒瀬 由佳梨 *Yukari KUROSE*
「time clipping」

プリント/A2/インクジェットプリント/27点

作者コメント

“故郷 暮らす街 異国”それぞれで過ごした時間の一部を切り取り、同一上にランダムに並べました。どんなに私的な時間の切り抜きだと思ってもそれは誰かの1ページでもあるのです。

選評

クールに、少し引いたように撮った日常写真を僕は「ネオコンボラ」と呼んでいます。その流れの1つです。その基本的な特徴は写真に対する批評性で、ただ単に日常を切り取っただけではこういう風にはならない。そこが他の日常スナップと似て非なるところ。この人は、自他の写真を見つけた上で写真を出している。ということで、今回の「ネオコンボラ」系のなかで一番完成度の高い作品を選びました。



村田 卓也 *Takuya MURATA*
「家族の中で」

ブック/B4/タイプCプリント/22点

作者コメント

「まとも」にふるまおうとして変に努力している家族の姿は、見るに耐えないほど痛々しく(=かわいい)見えます。変な努力のすきまに見える「コト」に苦笑しつつも、私のことのように親しく妙に安心できるのです。

選評

凍り付いたような瞬間が面白い作品です。次の瞬間、この人たちは動き出して見慣れた家族に戻ります。庶民の現実が、ある種のくたびれた感じと共に表現されていて、現代のドキュメンタリーの1つの在り方のようにも感じます。子供のうつろな疲れた眼差しが衝撃的で、現代の空洞化した家族の荒みぶりがよく撮れていると思いました。

2012年度(第35回公募)佳作受賞作品
選: ヒロミックス



荒木 一真 Kazuma ARAKI
「frontpage」

ブック/六切/48ページ

作者コメント

画面を豊かにする為、幾つかの要素を際立たせること。不要な情報を極力排除することで、対象から見て取れる簡素な美しさを引き出すこと。この2点に重点を置き、制作に取り組んでいます。

選評

白と黒のモノトーンという表現がおしゃれです。80年代によくこのような極端に感情的な要素を排除した、グラフィック的な写真集などを見掛けます。最近80年代リバイバルがあったこともあり、写真の捉え方を現在の流行と併せて考える方法や、このようなデザイン的な写真表現もある、ということも伝えたくて選びました。ただ流行に合わせて、デザイン的な要素の写真作品というのはとても豊かだった時代の西洋的な方法論なので、今後このような表現はなかなか見る機会がなさそうです。やはり需要があるのは人物が上手い人なので、人物も見てみたいです。

五十嵐 朋子 Tomoko IGARASHI
「the remotest」

六切/タイプCプリント/65点、
ブック/A4/カラーコピー/74ページ

作者コメント

世界の果てを見にいきたいと思った。そこは確かに、物理的にも精神的にも果てに遠くない。人も物もすべてが秩序からこぼれ落ちようとしている世界が次第に薄まっていく。風は風のまま 波は波のまま 夜は夜のまま 冬は冬のまま ただそこにある。

選評

抜けがよくて気持ちが良いですね。リフレッシュしたいときに見たくなる写真です。今の時代はみんな色々大変なので、この方や他の皆さんのように爽やかな気持ちになれるもの、そっち方面へ引っ張って行ってくれる人は需要があると思います。装丁が惜しいですね。もう少し違う感じで見たいです。



平岩 毅雄 Takao HIRAIWA

「北緯35度7分 東経138度37分/2011年12月17日0時~24時」

溶剤出力/6000mm×1500mm/ターボリン/1点

作者コメント

無名な特定場所からの時刻の採集。システムティックに分解、時系列に再構築された風景から立ち現れるnoise。時間はなめらか。時刻はぶつ切り。時間は静かで、時刻はnoise。平穏で何もない一日でさえ時刻に縛られている。

選評

キラキラしていて白昼夢みたいで不思議。心地よく希望があります。1点しかないのも、もう少し見たい感じがあります。加工もしてありますがセンス良く仕上げているので選びました。全体的に前向きな広がりを感じます。昼と夜の両方があるといいですね。



村上 賀子 Iwauko MURAKAMI
「HOME works 2011」

ブック/四切/タイプCプリント/40点

作者コメント

目にしたものの、語られたこと、思い出すもの。現実と虚構の境はあってないようなものだ。私はそれを「写真」という経験に置き換える。今のところ反解釈として見続けている。逆説的に意味もそこから生まれると思う。

選評

元気があって、楽しい感じが凄くします。写真がよいと思うときは理由もなくなんとなく好きかどうか、ということが判断基準になったりしますが、この作品もそうでした。寂しさの中に趣味の良さを感じ、気になって名前を見たところ福島の方だと知って、より言葉に表すのが難しい時間を過ごされているのだなと思いました。計り知れない思いの中でも、引き続き日常が続くことや、逆に色々な違和感や戸惑いなど、写真から色々想像しました。写真が語り掛ける雰囲気や、自分が今ここ存在している、という思いが伝わります。この、「語り掛ける感じ」「存在の表明」「感情が溢れる」この3つも写真には大切なポイントです。他の作品も見たい。



2012年度(第35回公募) 優秀賞選出審査会総評

評：大森 克己

表現のバリエーションが少なく、萎縮した感じを受けました。もっとみんな写真にロマンを感じて欲しい。強度のある作品を見てみたいです。

写真は入口が広い、写真にかけられる思いを強く持って勉強して、いろんなことに挑戦して欲しい。写真はレンズの前にあるものしか写らない。だからこそ、遠くのことでも考えてみて欲しいということ。審査員がどうか、去年の受賞作がどうか、現代美術のトレンドがどうだというようなことはどうでもいいわけで、人間がなぜ生きているのか、なぜモノを作りたいのか、世の中の仕組みとか…。美的なことでも倫理的なことでも政治的なことでも何でもいい。いろんなモチベーションがあると思います。それらを一生懸命考えて欲しいと思いました。それから、デジタル写真にしても銀塩にしても「モノとしての仕上がり」ということに気を使って欲しい。応募されたデジタル写真を見ると、そのほとんどが非常に安っぽい。そして銀塩プリントのほとんどはあまりにも古くさくみえる。そうではないものを見たい。それは方法論なのか思考の丁寧さなのかはわからないけれど。

評：佐内 正史

まず最初に、自分の気持ちというよりも、写真のことがあるような作品が見つかってそれがよかった。そういう作品を優秀賞に選びました。

露出を合わせるとかピントを合わせるとか、そういうことが写真のこと。普通に見ていて気持ちがいいというのは、自分のことじゃなくて写真のことに近いことで、近づいているんだと思います。

少し上向き、少し下向き、少し横向きというのはすごく気になるところだし、横長のものを広く撮る、縦長のものは縦に広く

撮ると感じる、熱いものを熱く、寒そうなものを寒そうに撮ると同じこと。例えて言うならば、おいしいオレンジジュースとかと一緒に。おいしいオレンジジュースは、それだけでいい。そこに何か余計なものが必要なくて、とやかく言わずにおいしいということ。何か足さなくてもそれであるということ。単純。ただの写真。そういう感じがしてくる写真が結構あって、去年より全然いいと思いました。

評：榎木 野衣

自分の撮った作品に対して自省できていないというのか、顧みられていない作者が多いという印象を全体に持ちました。その傾向が何に由来しているのかはわからないけれど、写真の世紀を切り開くと言うよりは、写真を撮っている自分に依存して自我を保っているようなものが目立っているのが気になりました。

今年この会場で思ったことは、見る側の自分もどんどん変わってきていて、身体的に見るようになってきているということです。広い通路を歩きながら、ブックも基本的には立ったまま見て、もちろん目で見るとはんですけど、大きな頁をめくるなど常になんらかのアクションを伴っている。そういう観点から、目だけではなく、身体そのものに訴えかけてくる写真を選んでいるということは言えます。

評：清水 穰

今回も、互によく似た作品がある種の傾向をなしていました。1つは、デジカメでかつり捉らえた日常スナップ。ストレートスナップではあるが幾何学的で、作為的な風景に見える、など。比較的暗めの雰囲気もモチーフもあまりにも似ていて、「ネオコンボラ」的表現はそろそろ飽和状態にあるのではないかと

思わされたので、それとは違う人を選びました。20代後半～30代の作家の表現はそこに集中していますが、次世代の写真家は次の表現を模索して欲しいです。

他には、いくつかデジタルカメラが自動的に強いてくるある種きれいな色合い、ツルツルした質感に逆らうような粒子の荒れ、紙の質感(和紙)、テクスチャー、触感を求める感性が散見されたのが興味深かった。全般に今回は、写真を見る力の差が出ましたね。撮る力よりも見る力で差が出た気がします。

評：ヒロミックス

震災後の昨年と今年では異なる部分はあると思いますが、もっと人々を元気づけるような前向きな表現をたくさん見たかったです。

自分の悲しみはグッと我慢して、人々に愛や力を与えたいという気持ち、そういうのを期待していました。

でも、それぞれが本当に色々な思いをしましたから、そんな未来人的な感覚の人はなかなか少ないです。悲しいときは悲しい表現を見て癒される心理もあると聞いたので。

キレイなものは癒す力があるということを知っておいてほしいです。

それから直感的な美の作品を見せてほしいと思います。感動した透明な心、心が洗われる瞬間、それは自分だけの気持ちです。でもそれを写真に撮ると他人とも共有出来る。

写真の良さはそこです！愛ですよ。

これからは、自分のことしか考えない人ではなく、人に何かを与えられる愛情深い人達が大きな役目を任されるのではないかと思います。写真も、人を美しく撮るには人類愛が欠かせません。ロジカルではなくもっと感覚的なキラキラした時代がくると思っています。時間を無駄にしないでその辺を大切に考えて製作して頂きたいです。

2012年度(第35回公募) 審査員プロフィール

おおもり かつみ
大森 克己

写真家。1963年生まれ。1994年度(第9回公募)写真新世紀優秀賞受賞(ロバート・フランク、飯沢耕太郎選)。主な写真集に『サルサ・ガムテープ』(1998年 リトルモア)、『encounter』(2005年 マッチアンドカンパニー)、『Bonjour!』(2010年 マッチアンドカンパニー)など。最新作は2011年の春、桜に導かれて東京から福島へと旅して撮影された『すべては初めて起こる』(写真展・ポーラ ミュージアム アネックス/写真集・マッチアンドカンパニー)。

さない まさふみ
佐内 正史

写真家。1995年度(第12回公募)写真新世紀優秀賞受賞。常に写真の時代をリードし続け、出版した写真集は多数。2002年に写真集『MAP』で第28回 木村伊兵衛写真賞受賞。2008年には写真集レーベル“対照”を立ち上げ、2012年3月にその第12弾写真集として『ラレー』を発売するなど精力的に活動中。

さわらぎ のい
榎木 野衣

美術批評家。1991年に刊行した最初の評論集『シミュレーションニズム』が、90年代の文化動向を導くものとして広く論議を呼ぶ。また主著『日本・現代・美術』では日本の戦後を「悪い場所」と呼び、わが国の美術史・美術批評を根本から問い直してみせた。他に大阪万博の批評的再発掘を手がけた『戦争と万博』など著書多数。近年は岡本太郎の再評価や戦争記録画の再考にも力を注いでいる。現在、多摩美術大学美術学部教授、芸術人類学研究所所員。

しみず むの
清水 穰

写真評論家。1995年頃より現代美術・写真、現代音楽を中心に批評活動を展開している。1995年「不可視性としての写真：ジェイムズ・ウェリング」で第1回重森弘淹写真評論賞受賞。主な訳書に『ゲルハルト・リヒター写真論／絵画論』(1996年淡交社)、『シュトゥックハウゼン音楽論集』(1999年現代思潮新社)。著書に『白と黒で、写真と…』(2004年)、『写真と日々』(2006年)、『日々は写真』(2009年)、『プルラモン』(2011年、以上、現代思潮新社)などがある。現在、同志社大学教授。

ヒロミックス

写真家。高校卒業後に応募した「SEVENTEEN GIRL DAYS」で写真新世紀1995年度年間グランプリを受賞。写真集『GIRLS BLUE』(1996年)は写真界異例の部数を売上げ、ガールリーフォトブームの先駆けとして、その後の写真表現の在り方に大きな影響を及ぼす。2001年写真集『HIROMIX WORKS』で第26回木村伊兵衛写真賞受賞。個展「早春、心の輝き」(2009年、hiromiyoshii ギャラリー)他多数。

赤鹿 麻耶 *Maya AKASHIKA*

「電!光!石!火!」

2011年度(第34回)グランプリ受賞者







赤鹿 麻耶 *Maya AKASHIKA* 「電!光!石!火!」

写真新世紀(第34回公募)優秀賞、2011年度グランプリ受賞者

気付けば自分の写真が二つに分かれて伸びていた。

最近はさらに意識的にその二つを切り離した。

二つの写真

一つは、昨年「風を食べる」のように自分の想像を出発点にした作品づくり。もう一つは日々の生活の中で撮ったもの。これが今年の「電!光!石!火!」だ。自分の中でこの二つの作品は両極にあり、写真の持つ全く別の力をみる。

想像をもとに出発したセットアップは写真を始めたころから変化はあれどずっと継続していて、この方法は自分と、自分の撮るものに対して常に疑う心を側に置いておかなければならない。自分が作ったものだけど私自身どこか遠くから見ていて、冷たい感覚がある。

頭と心、その内とよく話し合い、相談する。嫌でも自分のことを知らねばならないし、作り手にはその責任があると思う。

いつもいつも気持ち良く見れる作品を追いかけるのは果てなき繰り返しの作業にも感じるが、時間はかかっても、纏わり付いていたものが少しずつ落ちて、軽くなっていく感動がある。

自分が作るとか、作ったものがどうか、そういうのとはまた別で、もともとイメージネーションというものを出発点とした写真たちがどこまで外へゆけるのか。

電光石火

そんな写真と対称的にあるのが今年の個展「電!光!石!火!」だ。スナップ写真と呼ばれるものがどこからどこまでを指すのか分からない。日々の生活で気の向くままに撮った。撮るときに「つくる」という意識が無い分、とても力が抜けている。普段持ち歩くのは35mmのフィルムカメラで、暗室でプリントしている。綺麗とか、不思議とか、おもしろいとか、残したいとか、世の中の人々がカメラを持ち、撮る、その感覚とそれほど大きく違わない。ただ、よく見たいとは思ふ。瞬間というものに始まりや終わりの合図は無いから、しっかり目を開いてないとたかさんのことを見落とし見逃してしまうだろう。そして知らないまま、気付かないまま。

目の前に起こることは稲妻みたいに一瞬で、私にはいつも青白い

閃光に見える。その瞬間をギュッと真空パックみたいに閉じ込めて、いつまでも持っていられる。カメラそのものや、写真が持つ力の一番原点だと思う。

瞬間は点。日々の上下左右に散らばる点を集めていく。決して無理はせず、その時その時の鏡になれば良い。あっちこっちバラバラで不安定だった点も、やがて時が経ち見返せば案外全てがフラットにみえたりする。点が線となり繋ぎ合わせば、まあいい円となる。自分が想う写真の暖かくて優しいところはこういうところにある。想像からつくること、そして日々の瞬間を集めること、自分の中ではそれぞれから写真の良いところを教えてもらう。冷たいとこ、暖かいとこ、内に向かうこと、外へ向かうこと、優しいところ、厳しいところ、二つを分ければ分けるほど同時に多くのことははっきり見えてくる。どちらもここまで、と終わりを考えたことは無い。

発表するのは、これから長く続くであろう実験の途中報告みたいなもので、それを少しでもたくさんの人たちと覗き込めたいなと思うからだ。でも結局のところ、私を知るべきことや学ぶべきことの多くはいつも想像からつくるものにあった。それをより自分から切り離し、もっと深く潜るために日々の写真がある。



赤鹿 麻耶

1985年 大阪府生まれ
2008年 関西大学中国語中国文学科 東アジア映像文化論専攻卒業
2010年 ビジュアルアーツ大阪写真学科夜間部卒業
2011年 「風を食べる」でキャノン写真新世紀2011年度グランプリ受賞
2012年 女子学生シリーズで「4 PHOTOGRAPHERS EXHIBITION」(Bloom Gallery)、同年 Visual Arts Photo Award 2012大賞受賞、写真集「風を食べる」出版、個展「電!光!石!火!」(「写真新世紀東京展2012」、東京都写真美術館)

赤鹿 麻耶インタビュー

頭の中のイメージを作品化した「風を食べる」でグランプリを受賞した赤鹿麻耶。

1年後の個展「電!光!石!火!」ではエネルギー溢れる日常のスナップ写真が会場を埋め尽くした。セットアップ写真と、スナップ写真。赤鹿が提示したこの2つの方向性は、今後どこへ向かうのかインタビュー。

ータイトルの意味を教えてください。

私にとって、「瞬間」は青い閃光。日常の中で稲妻みたいに光る、その一瞬を捉えた写真たちなので「電!光!石!火!」と名付けました。一番古い写真は10代の頃の写真ですね。平成16年の日付が入った写真は、高3の卒業旅行で中国に行った時のもの。展示を前提に撮った写真ではなくて、あくまでも日常のスナップ写真です。

ー「風を食べる」のようなセットアップ写真は一枚も無いのですか？実は日常の一場面と言うには不自然な写真もあります。セットアップ撮影の合間に撮った写真や、日常の中でポーズをとってもらった写真も混ざっているのです。でも、こういう日常のスナップ写真とセットアップの写真は、しっかり分けることに意味があると思っています。今後は、イメージから作る写真の方をもっと自分自身や日常から切り離して行って、一目で違うと分かるようにしていきたいです。

ー日常を撮ることと、頭の中のイメージを演出して撮ることとは、赤鹿さんにとっての位置づけはどう違うのですか。

写真を作品として撮り始めてからずっと、頭の中のイメージを具体化するという手法をとってきました。でも、ある時期にそういう写真が嘘くさく感じられるようになってしまって。それまでは、普段からカメラを持ち歩いてはいなかったのですが、フィルムカメラを持ち歩き、スナップ写真を撮るようになりました。日常の写真は私に優しくてあたたかい。写真家以外の人が写真を撮る時に感じるような、単純な喜びを感じることができます。カメラというものが発明されて、写るといふことの素晴らしさ。それに比べてセットアップの写真は、自分と写真の繋がりを常に疑いながら撮っていかなければいけないので、とても厳しくて冷たい作業なのです。

ー今後はどちらを重点的に撮影していこうと考えていますか。

今回、日常の写真を展示してみて「違うなあ」と思いました。やっぱり私の使命はイメージから作る写真の方に在るのです。セットアップ写真が、もっと深く潜り、もっと高く飛べるように日常写真が支えてくれている。日常のあたたかい写真たちが、私に写真の良さを忘れさせないでおいてくれるのです。そうやってバランスをとっています。

ーフィルムとデジタルの使い分けは？

イメージから撮る写真は、デジタルを使っています。その場でチェックしながら撮るためです。日常の写真はフィルムです。日常の写真は、その場で見る必要はないのです。暗室作業の何が出てくるか分からないワクワク感も好きですよ。

ー赤などの強い色彩は、中国の影響ですか。

色は特に意識しているわけではありません。原色が好きなので、自然と目がいくものがそうなるのかもしれない。「風を食べる」でもそうでしたが、色味を変えるなどの加工はほとんどしません。中国

の影響というのは、グランプリ受賞後薄れつつあります。初めて海外旅行で行った国なので強く惹かれましたが、それに執着する気持ちは今ありません。

ー友人や家族を撮った写真とのことでしたが、被写体は女の子が圧倒的に多いですね。

それは単純に男の子の友達が少ないからです。仲良く、リラックスできる友達は女の子の方が多い。運のいいことに、私の周りには素敵でフォトジェニックな女の子がたくさんいるのです。でも、そのせいで写真が友達自慢のようになってしまうのは良くないこと。最近では年齢を問わず、幅広く興味を持つようにしています。

ーグランプリを受賞後、何か心境の変化はありましたか。

自分のやっていることに迷いや不安が無くなりました。以前は写真と自分が独立していました。何か写真が特別なものを感じていたと思います。今はやっとなら写真と自分がきちんとフィットして進み始めてくれたように思います。自分の中で写真は全然特別じゃない。普通のことです。今はもっと他のことが、例えば家族のことや、生活、そういうことの方がずっと大切だと感じています。

ー昨年11月に『風を食べる』が写真集として出版されましたね。

Visual Arts Photo Awardの大賞を受賞して出版することになりました。写真集の出版はなかなかタイミングが掴めずにはいましたが、写真新世紀の受賞をきっかけに決心がつかしました。写真についても写真集の構成についても、まだまだ満足できるところとできないところがあります。完璧ではありませんが、初めての写真集ということで、私の原点となることは間違いありません。そもそも私がやっていることは終わりが無い実験のようなものです。作っては「いや違う」となって、新しいものを作り始める。その繰り返しです。この途中経過をより多くの人とシェアできたら良いと思います。

ー写真集の表紙に写真を使わなかったのですね。

はい。白い表紙は私の心境を映し出しています。いろんなものを落とそうと思った時期に生まれたのが「風を食べる」なのです。

ー受賞後にホームページも立ち上げられたようですね。

受賞後に賞金でアメリカに行ったのですが、その時向こうの人に自分を紹介するものが何も無くて困りました。写真を撮っているといてもどの程度のものなのか、言葉も通じない人たちに分かってもらうことは難しい。ウェブサイトや写真集があると、どこに行っても私がどんな写真を撮っているのか伝えられるから嬉しいです。

ー雑誌やコマーシャルの撮影には興味がありますか。

写真を始めた当初はそういうものに憧れていました。でも今は、自分から動く程、そこに意識は注がれていません。グランプリを受賞してからは、周囲の人に「東京に出てこないの?」と聞かれることが多くなりました。きっと、写真新世紀というネームバリューを使ってそういうお仕事をしたらどうかということですよ。ただ私はグランプリをそういう風に捉えている訳ではなくて、あくまでも続けられる自信がただけなのです。今は作品制作をもっと深化させたいという想いが強い。イメージするものがちょっとずつ大きくなると、今まで1人でやっていた撮影が難しくなるかもしれない。カメラの知識も、まだまだ足りない。今年は写真集や個展で忙しかったから、一旦落ち着いて色々考える時間が欲しいですね。

ー今後の抱負を教えてください。

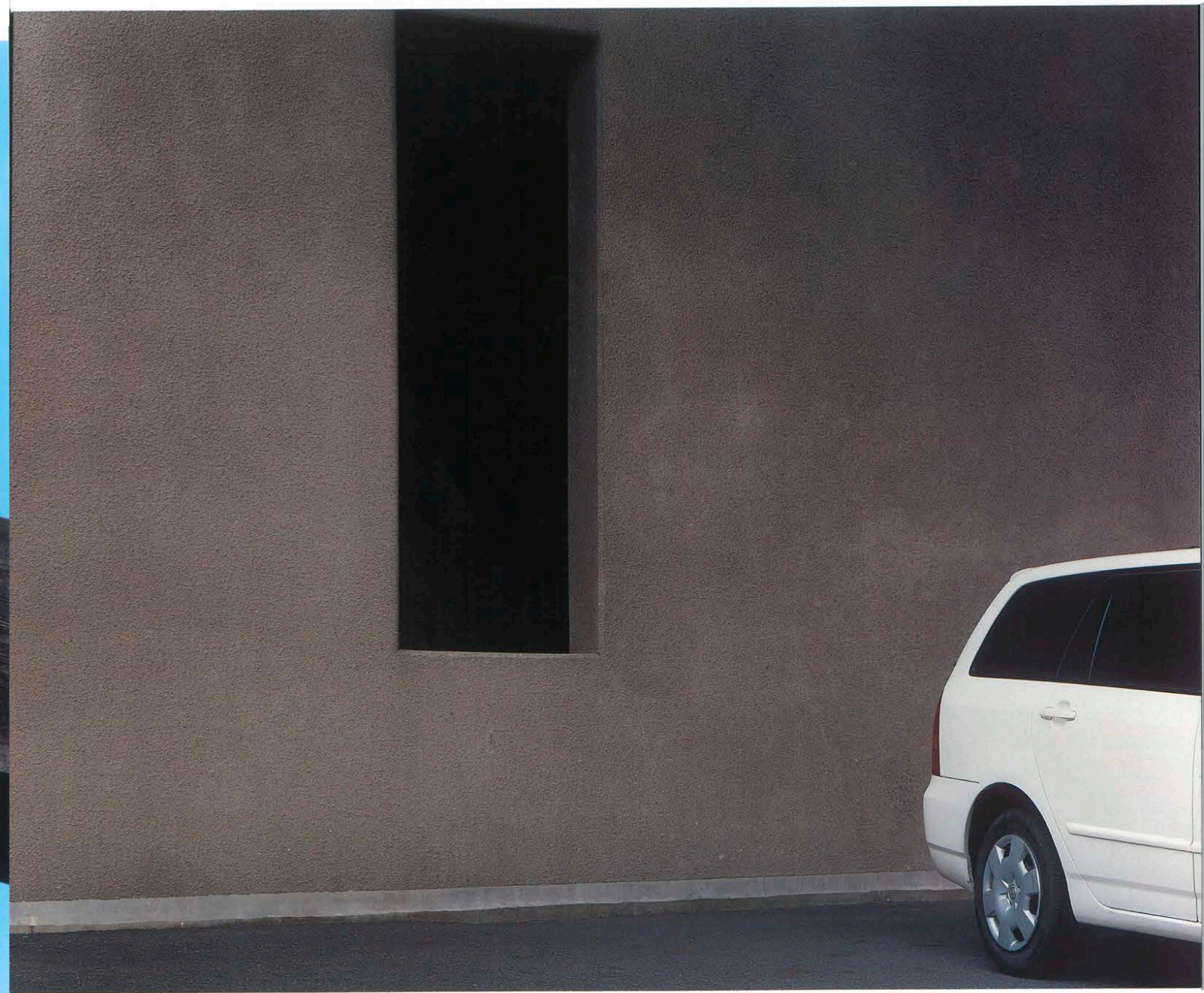
良いことも悪いことも、流れていくもの。その流れをどう作るかは、自分の気持ちの持ち様です。ひねくれているなら、いい流れはこない。元気で明るく、外に向かえる写真家になること。これが、私の今後の目標です。

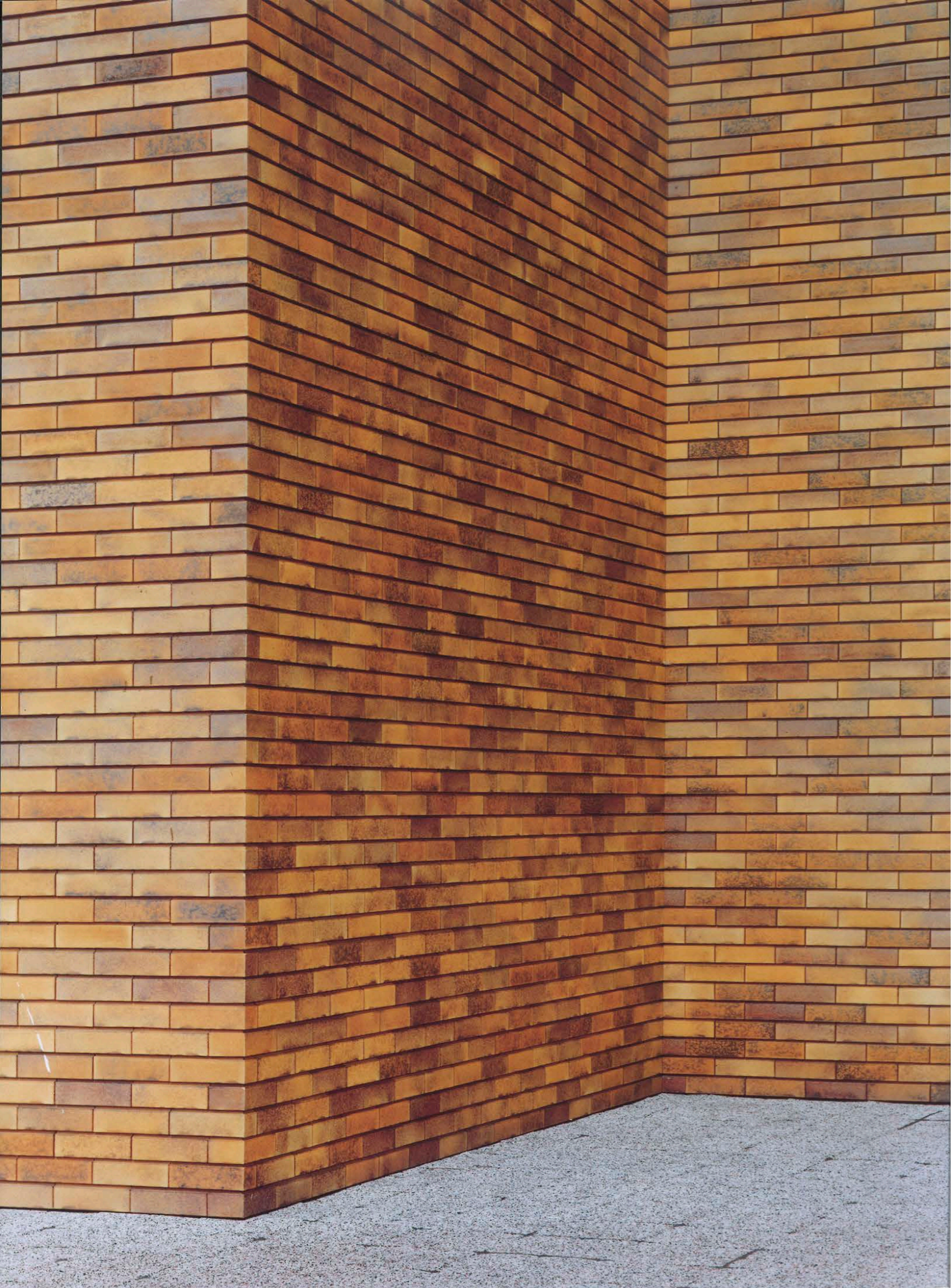
安村 崇 *Takashi YASUMURA*

「1/1」

1999年度年間グランプリ受賞者







安村 崇インタビュー

写真新世紀 1999年度年間グランプリ受賞者

1999年度年間グランプリ受賞者

1999年度グランプリを受賞した「日常らしさ」から「自然をなぞる」「せめて惑星らしく」と作品を展開してきた安村崇。2012年発表の新作「1/1」と、その制作スタイルについてインタビュー。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー「1/1」というタイトルの意味を教えてください。

安村:「1/1」というタイトルは<ファインダー/現実>という関係で捉えています。現実の「1」が「/」というカメラを通してファンイダー上の「1」となるという感じです。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー写真が実物大の大きさをしているという意味ではないのですね。

安村:そういう意味ではないです。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー絵画のように見える写真もありますね。

安村:それは、「何をもって写真か」ということを考えながら制作しているからだと思います。写真はいつ、どこで撮られたかというその写真の出処を色濃く含み持っているようにみえるのですが、それらの要素がそぎ落とされたとき、どんなものが見えるのか。そのあたりが一見、絵画のような見え方をさせるのかも知れません。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー撮影に使用したカメラは？

安村:4×5インチのカメラです。「日常らしさ」からずっとこのフォーマットを使っているのですが、4×5というのはフィルムのサイズ=ファインダーのサイズでもあります。おおよそ文庫本くらいの大きさがありますので、僕にとってはそこに見えるものがもう写真のようであり、写真を見ながら写真を撮っているという感覚になることすらあります。そのような作業の中で、カメラの前にあるものと、ファインダーに映るものとの間に違和感を感じることがあり、それがこのシリーズの始まるきっかけになっています。カメラでしかみる事が出来ないもうひとつの「1」を確認しているという感じです。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー見ながら撮れるというと、まるでデジタルカメラのようですね。

安村:そうですね。ただ、ファインダーを写真のように感じるといっても、そこに見えるものがそのまま写真になっているということでもなく、最終的には暗室で出会うのですが、いつも写真にしたらどう見えるかということに興味がありますので、現像機から写真が出てくるときはシャッターを押す時と同じくらいエキサイティングな時間です。そういう意味で僕にとって写真は“ガラガラポン”という感じもありますね。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー撮影はどういう場所でされましたか。

安村:地方の公共の場所が多いです。公園や公民館、港などです。住宅街や、国道沿いなどもありますが、最近はどこでも撮影には気を使います。

1999年度年間グランプリ受賞者

ーグランプリを受賞した「日常らしさ」から、「自然をなぞる」、「せめて惑星らしく」「1/1」と新しいシリーズを展開させていく時に、どのように着想を得ましたか。

安村:すでに撮影した写真をながめ、気がついていなかった事を発見したり、別の見方を試みながら、きっかけを作り出してきたように思います。また、日々のちょっとしたことが契機になることもありますし、いずれにしても手を動かしながら考える時間を大切にしています。主に自分が撮影した写真との対話の中から生まれてくるものです。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー1人で作品を制作することに孤独を感じたことはありますか。

安村:制作中は孤独です。むしろ孤独なほど仕事がしやすいです。1人で地方へ行ってこのような壁などを撮影する…と言葉にするとより孤独な感じがしますが(笑)。ただ、人にみせるという前提があるので、それほどでもないように思います。

1999年度年間グランプリ受賞者

ースペインやニューヨークなど海外でも展示をされていますね。

安村:スペインでは2006年にフォトエスパーニャという催しで「自然をなぞる」を全点展示する機会がありました。40数点まとめて展示するということはそれまでなかったことで、とても貴重な経験でした。ニューヨークでは2007年にYossi Milo Galleryで「日常らしさ」を展示しました。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー「日常らしさ」は日本人ならではの「語感」が感じられる作品だと思います。例えば、棚の中にケーキがある写真。これは、「棚からぼたもち」という諺を思い出させますよね。こういった「語感」は海外の方には伝わりづらいのではないのでしょうか。

安村:どうでしょう?いろいろな見方があって面白いなどは思いますが。このシリーズはよく「外国の人が撮ったような」という形容をされましたし、懐かしさばかりを感じる人もいるようです。同じ写真でも見る人の経験や環境によって感じることにかなりの隔たりが生まれる場合がありますね。それがその写真の伸びしろだと考えられないこともないと思いますが。

1999年度年間グランプリ受賞者

ータイトルが秀逸ですね。

安村:タイトルは観る人と作品をつなぐ架け橋のようなものとして大切に考えています。シリーズ制作の最初の頃は、タイトルというほど決定的なものではない、なにか全体を結ぶくらいの言葉を常に反芻していますね。制作が進むにつれその言葉が変わることは度々ありますし、言葉が変われば撮るものやセレクトも変わる。表には出ないけれど作品を膨らませてくれるもののように思っています。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー作品制作を続ける中で、行き詰まったり辛かったりした事はありますか。
安村:進捗が芳しくないという事は間々あることですが、制作の過程では大切な局面だと思しますので、慎重に出てきたものと向かい合うようにしています。思っている事や考えが写真から感じられなければ、写真から出てくるものに考えを沿わせていくというように、少しずつ変化を受け入れていく事で前に進めていきます。

1999年度年間グランプリ受賞者

ー今後についてお聞かせください。

安村:まずは今までの作品を写真集にまとめていきたいですね。進行中の「1/1」については、もうしばらく続けようと思っています。今後制作するであろう新しい作品については、まだわかりませんが、どんなものを作れるか楽しみにしています。

写真新世紀の歩み

「写真新世紀」は、1991年に年4回の公募が始まりました。1994年から年2回の公募、そして現在では年1回の公募に集約され、35回を数えるまでになりました。応募者数も毎回1,000人を超える規模に成長し、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。また、受賞作品の展示や受賞者のトークショーでも多くの来場者を集め、「写真の現在」を広く伝える役割を担っています。

	応募者数	グランプリ	優秀賞	審査員	
				レギュラー	ゲスト
1992 第1～4回公募	483人	木下 伊織	岩崎 昌弥 小川 嘉朗 奥谷 佳子 オノデラ ユキ 今 義典 清水 麻弥 辰本 まこと 千葉 鉄也 ノニータ(谷野浩行) 野村 浩 山本 美奈	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	――
1993 第5～8回公募	505人	市川 綾子	遠藤 年勇 大橋 仁 金城 民子 河野 安志 高橋 ジュンコ 土井 弘介 中山 英輔 西 光一 野村 浩 宮本 知保 茂木 綾子	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	――
1994 第9・10回公募	703人	熊谷 聖司	大森 克己 小倉 英三郎 金子 亜矢子 白土 恭子 ジャン＝クロード・ベレグー リン・デルピエール	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	ロバート・フランク(写真家) 坂田 栄一郎(写真家)
1995 第11・12回公募	456人	HIROMIX	A・R・T Puff 坂本 浩 佐内 正史 柴原 三貴子 野沢 文子 バトリシア・ガバス 本田 かな	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	ジャンクロード・ルマニー (仏国立図書館コンセルバトゥール)、 浅葉 克巳(アートディレクター)
1996 第13・14回公募	587人	野口 里佳	加藤 直司 菅野 純 黒瀬 英文 蛭川 実花 早船 ケン 吉田 優 ロス・バン・ホーン	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	伊島 薫(写真家) 椎名 誠(作家)
1997 第15・16回公募	537人	矢島 慎一	伊藤 トオル ヴァレリー・プラン 慶 高城 典子 山本 香 山本 耕司	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	カシン・リー(写真家) 森山 大道(写真家)
1998 第17・18回公募	771人	柏 亜矢子	池田 宏彦 岩崎 マミ 黒瀬 康之 佐藤 純子 ヴェロニック・ジリア 藤原 江理奈 守田 衣利	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	ベルナルル・フォコン(写真家) ホンマタカシ(写真家)
1999 第19・20回公募	759人	安村 崇	伊賀 美和子 遠藤 礼奈 岡部 桃 田邊 晴子 長尾 智子 矢ヶ崎 祐子 吉田 優	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	サラ・ムーン(写真家) 長野 重一(写真家)
2000 第21・22回公募	944人	中村 ハルコ	佐藤 篤 佐野 方美 澤田 知子 鈴木 良 谷口 正典 中村 年宏 山田 大輔	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	横尾 忠則(写真家) 倉石 信乃(写真評論家) ジル・モラ(アートディレクター)
2001 第23・24回公募	881人	――	今井 紀彰 佐伯 慎亮 新沢 もも たけむら 千夏 中谷 理子 中西 博之 西郡 友典 吉岡 佐和子	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	木村 恒久(写真家) 都築 響一(写真家)
2002 第25回公募	1,004人	吉岡 佐和子	岡本 英理 鍛冶谷 直記 SABA(高橋 宗正、中島弘至) ヨシダ ミナコ 吉本 尚義	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	マーク・リプー(写真家) 東松 照明(写真家)
2003 第26回公募	1,150人	内原 恭彦	榎本 一子 加藤 純平 藤田 裕美子 法福 兵吾 ヤマダ シュウヘイ	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	マーティン・バー(写真家) 鈴木 理策(写真家)
2004 第27回公募	1,087人	準グランプリ 川村 素代 滝口 浩史	大庭 英亨 ふじい あゆみ 山下 豊	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	ケビン・ウェステンバーグ(写真家) やなぎ みわ(美術家)
2005 第28回公募	1,324人	小澤 亜希子	新垣 尚香 梶岡 禄仙 とくた はじめ 西野 壮平 林口 哲也+松村 康平	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	ウィリアム・エグルストン(写真家) 蛭川 実花(写真家)
2006 第29回公募	1,505人	高木 こずえ	喜多村 みか+渡邊 有紀 清水 朝子 Palla 辺口 芳典 山田 いずみ	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	日比野 克彦(写真家) ボリス・ミハイロフ(写真家)
2007 第30回公募	1,277人	準グランプリ 黒澤 めぐみ 詫間のり子 中島 大輔	青山 裕企 田福 敏史 中里 伸也	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	榎本 了彦(アートディレクター) 具 本昌(写真家)
2008 第31回公募	1,517人	秦 雅則	岡部 東京 小山 航平 菅井 健也 保谷 綾乃 元木 みゆき	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	榎本 了彦(アートディレクター) 大森 克己(写真家) 野口 理佳(写真家)
2009 第32回公募	1,340人	クロダ ミサト	Adam Hosmer 杉山 正直 高橋 ひとみ 安森 信	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	榎本 了彦(アートディレクター) 蛭川 実花(写真家)
2010 第33回公募	1,276人	佐藤 華蓮	齋藤 陽道 柴田 寿美 高木 考一 谷口 育美	大森 克己(写真家) 佐内 正史(写真家) 榎木 野衣(美術評論家) 清水 穰(写真評論家) 蛭川 実花(写真家)	
2011 第34回公募	1,305人	赤鹿 麻耶	奥山 由之 木藤 公紀 バトリック・ツァイ 山田 真梨子	大森 克己(写真家) 佐内 正史(写真家) 榎木 野衣(美術評論家) 清水 穰(写真評論家) ヒロミックス(写真家)	
2012 第35回公募	1,325人	原田 要介	柿田 真吾 吉楽 洋平 長谷谷 ロビン 浜中 悠樹	大森 克己(写真家) 佐内 正史(写真家) 榎木 野衣(美術評論家) 清水 穰(写真評論家) ヒロミックス(写真家)	

公開審査会報告

2012年度グランプリは、原田 要介氏に決定!

2012年11月9日(金)、東京都写真美術館1階ホールにて写真新世紀第35回公募グランプリ選出公開審査会が行われました。グランプリ候補となったのは、応募者数1,325名の中から優秀賞を受賞した柿田真吾氏、吉楽洋平氏、長谷波ロビン氏、浜中悠樹氏、原田要介氏の5名。審査会では、候補者全員のプレゼンテーション、審査員との質疑応答の後、別室にて審査が行われ、審査員の合議により原田要介氏がグランプリに決定しました。

優秀賞受賞者のプレゼンテーションと審査員のコメント

持ち時間10分の中でプレゼンテーションが行われました。それぞれが作品の背景や制作意図、作品への思いを語りました。審査員からは、優れた作品に対する賛辞、率直な疑問、鋭い批評など、さまざまなコメントが寄せられました。

柿田 真吾：「forever acid」

ある晴れた日、街を歩いていた、たくさん留めてある自転車のサドルに目がとまりました。自分にとって身近な、コミカルで何だかエロティックな形状が面白く感じられ、撮ってみようと思いました。サドルの有機的なフォルム、官能的な光沢はとても魅力的なモチーフでした。あえて精密な描写ではなくコンパクトカメラを使用し、ブック形式にすることで、さくさくとリズムカルに見ることが出来る作品にまとめました。

大森 克己氏：大きな画面で見ると、展示とはまた少し違った魅力を感じました。自分の眼差しを押しつけがましくなく見せ、シンプルな展示も良かったです。個人的に好きな作品です。

榎木 野衣氏：日常世界では、サドルにもいろいろあって、カッコイイものばかりではないですね。けっこう選んでいるようですが、不格好な、たとえばレジ袋がぶせてあるとか、そういうサドルも見てみたかったですね。ヒロミックス氏：同じ角度で同じようなものが続くというのは不思議な感覚になりますね。お洒落で、装丁も良く、センスの良さを感じました。

吉楽 洋平：「BIRDS」

僕は普段の生活の中の小さな気づきやひらめきをもとに作品を制作しています。今回も、偶然通りかかった蚤の市で出会った本がきっかけになりました。それは鳥の図鑑でした。とても古い本で、前の持ち主によって鳥の絵が切り抜かれたページがいくつかありました。さまざまなことを想像しながら眺めていると、切り抜かれたページが、「残りの鳥たちを放て」と訴えかける僕へのメッセージのように感じられてきたのです。その声に従って、自分なりの方法で鳥たちを放とうと、僕は森へ向かい、鳥たちが森に溶け込むように撮影していききました。

佐内 正史氏：撮影者が監督でもあり主人公でもある。「写真の生活」の中の気づきを作品にする、頭の中のイメージを放つということに共感できました。書物の一部(鳥)を切り取り、樹木の合間に置くというのが「手法」としてではなく、すごく素直に見ることが出来ます。構図は静物的で「押し」がないところがいいと思いました。自分としては、写真は「雑貨であってほしい」という思いがあり、コップなどのモノとの並列感に好感が持てました。

榎木 野衣氏：偶然、というよりは計画通りに物事が進んでいて、予定されたストーリーに基づいて行動しているように思えました。森に行ってみると、思いもかけない出来事に遭遇すると思うんです。例えば、鳥以外の生きものがいたり、悪天候だったり、足を取られて転んでしまったり。そういう偶然が作品に取り入れられていたら、また違った面白い方向に展開したかもしれませんね。

長谷波 ロビン：「THE JAPANESE BEACH - SUMA -」とびっきりの「HAPPY!」な写真ができました。僕は10年あまり広告写真を仕事にしており、現場の雰囲気作りの大切さを学んできました。また、大阪で生まれ育った私としては、本当に面白いものはカッコイイ、面白さの中に格好良さがある、それを求めて撮影してきました。今回のテーマは、ずばり「関西」。5年にわたり、夏に神戸の須磨海水浴場で人を撮り続けました。街全体がボケとツッコミでできている、といわれる関西。集まる人は、みな個性のカタマリ。撮る自分も、撮られる人も、みな「お笑い」です。ビーチの真ん中に白いバックのお笑い劇場を作り、「いこうぜ! グレイトだぜ!」と叫びながら、ハイテンションで撮影しました。

榎木 野衣氏：人物の表情や動きがパワフルで、その土地の持つエネルギーや、人が内に秘めた力強さを感じます。あまり考えすぎず、直感で撮られたのが良かったのかもしれません。展示方法については、写真が小さくなってしまったのが残念。もっと大きく、一人一人の顔や個性をはっきり見せたほうが良かったのではと思います。

清水 穰氏：舞台を作ったということですが、カメラを向けて人をフレームの中に収めるということ自体、その人を舞台に上げるのと同じ効果があります。その舞台には逃げ場がありません。しかし長谷波さんは、もともとある(カメラという)舞台の中にさらに舞台を作り、被写体に逃げ場を作ってあげている。そして、この人たちは、撮る人のテンションの高さに付き合ってくれている。関西の人はやさしいので、ボケたら必ず突っ込んでくれます。それに寄りかかってしまっていて、彼らの本当の面白さを撮れていないと思います。この白い舞台はいらなかったんじゃないかな。5年間の撮影の中で選び抜かれた関西人の面白い姿であり、見飽きない写真だと思うので、少しもったいない気がします。

浜中 悠樹：「樹々万葉 (きぎのよろずは)」

タイトルには、千差万別の命の物語として広く被写体を撮りたいという思いを込めました。人工的な彩色、人の心を掴まんとするデザインがあふれる現在、本当に純粋な生命の造形の美しさはどこにあるんだろう。そんな疑問を感じていたとき、植物には人の手の関与しない、生命としての純粋な形があるのではないかと思います。

京都在住の私は、生け花や石庭など空間を大事にする表現を目にする機会も多く、空間の中に植物の命が巡るような日本の本当の美を形にしたいと思っています。撮影は曇りの日を選び、空間そのものの美術的な美しさを意識し、曇天の真っ白な空間の中で命が踊る様子を表現しています。また、伊勢和紙にプリントすることで、適度な厚みとざらざら感によって木々の生々しさを表しました。

ヒロミックス氏：自然が好きで、感動しながら撮られているのが伝わってきます。作品を見たとき、きれいだなと感じたと同時に、ほっとするような思いもありました。古来からの日本やアジアの、きれいだと思う基本中の基本が収められていたからです。いま、日本の美が改めて求められていると聞きます。特に震災以降は、やさしいもの、温かいものをみんなが見たがっているような気がするんです。

大森 克己氏：美しいものを求め、美しいものを見て感動し魂が打ち震える経験は、大切なことであり、ものを作る前提でもあります。ただ、「純粋な命としての美しさ」「日本の本当の美」といった表現は、僕にとってかなりきわどい。それをどう受け取っているのか迷います。むしろ僕なら、「不純な命としての美しさ」を見たい。世の中が大変なときに「日本の美」「純粋な生命」とストレートに言われると、少し呑気すぎるような気がしてしまいます。

原田 要介：「世界するもの」

私の作品は「世界するもの」をテーマとして撮ったというよりは、写真という行為を通して、被写体となった人やモノ、風景、現象が「世界するもの」として現れ、そこに日常世界とは別の特殊な場が立ち上がってくる、というものです。私は写真を人に見せること、外に出すことの意味が見つけられずにいました。外に出すためにテーマやコンセプトを定めて写真を作るという行為は、何か消費するためのものを作っているようで違和感がありました。私には写真という行為そのものが目的になっているようなところがあります。

写真は対象にゆだねる部分が大きく、自分を見ることの媒介者でしかあ

りません。ぼろりと現実からこぼれ落ちては、見るということを宙ぶらりんにするもの、それを求めて、自分を空気に溶かして、意識が馴染むのを待っています。

私は瞬発力がないので「決定的瞬間」はだいたい逃すのですが、時間軸から切り離されてある程度の長さを持ったタームの中では、見ている側と見られている側がせめぎ合い、意識が行き来するうちに混じり合う「中間の場」のようなものが発生します。私の視覚は目の奥へと引っ込み、頭の後ろから眺めているような感覚になります。見るという行為は、視覚を凝縮して固める感覚ではなく、視覚を開く、固めたくても固めきれないものが拡散して意識と一緒に抜けていくという感覚のほうが近いと思います。私の作品が、いつまでも眺めていられるような、見ることを意識せずとも見ることに入り込めるようなものになっていれば嬉しいです。日常は耐え難い軽さと散漫さを伴って膨大な「新しらしさ」に溢れています。めまぐるしく更新される瞬間的な悦に身を任せて麻痺していく感覚を一時保留にして、私は自分の目で、自分の体験として「見る」という行為をしたいのです。いろいろなものを疑って、否定して、それでも最後には世界を肯定したいのだと思います。私はもっと遅い目を持って、「見ること」についてもう少し考えていきたいと思っています。

清水 穰氏：本人がおっしゃるように、バツと見ていいと思える作品ではないし、瞬発力もない。しかし、しばらく見ていると、その写真を選ぶために彼が排除した数多のイメージが浮かび上がってくる。時間の「たまり」のある感じが良いと思いました。ただ、展示をなぜあのようなパズルみたいな形にしたのか、たくさんある作品の中からどうしてこれを選んだのか、少し歯痒く思う部分もあります。「世界する」とは、世界からはみだす、自分の中の世界からずれる、ということだと思うんですけど、それを長方形パズルに収めてしまうと写真1枚1枚の力を削いでしまいます。良いと思える作品なのに、説明が必要になるような。誰もが写真の前に立ち止まってくれる、そんな力がほしい。そういうこともこれから考えてみてほしいと思います。

ヒロミックス氏：女性がとても美しく撮られています。さみしそうだったり、切ない感じだったり、表情がいい。人物がうまい人には需要があります。原田さんの作品は、いい意味で男性なのに少女のような、不確かさや、現実について探っている感じがありますね。

グランプリ発表

表彰式では、緊張が高まる中、読み上げられた名前は原田要介氏。原田氏には表彰状と奨励金の目録、副賞としてキャノン一眼レフカメラ「EOS 5D Mark III」が贈られました。さらに、2011年度のグランプリ受賞者、赤鹿麻耶氏より「私にとってグランプリは生活や心のベースになりました。受賞して、写真がもっと日常のこと、普通のことになったのが嬉しかったです。これから自由に作品づくりを行ってってください」とお祝いメールが送られました。原田要介氏の受賞の言葉に続き、審査員を代表して清水穰氏より講評が述べられ、拍手のなか閉会となりました。

グランプリ受賞者の挨拶：原田 要介

自分の中で写真は生活の一部となっていますが、もっと呼吸するように撮れたり、当たり前のものでして馴染んでくれるといいなという思いがあります。審査員の先生方のご意見にもありましたが、あまりジジくさくならず、パワーを持って、精力的にいきたいと思っています。ありがとうございました。

講評：清水 穰氏

この5作品は非常に僅差で、最初は票が割れ、激論になりました。大きな未知数、大きな既知数、そのどちらも私たちは選ぶことができず、未来に向けて「極端なもの」を選ぶ勇気が持てなかったという後悔があります。大きな賞であること、それに、言葉で説明せずとも伝わるパワー、ポピュラリティ、人気、あるいは未知数……いろいろなものを考えた上で、今回は実力者に決定しました。

原田さんには、世界に向けて写真を表現していく「力」を身に付けてくださることを期待しています。世界中の、まったくあなたのことを知らない人、あなたについて興味もない人にも届けることを考えて、これから力強く撮ってほしいと思います。おめでとうございました。



写真で何ができるだろう？
写真でしかできないことは何だろう？

作品募集

写真新世紀

NEW COSMOS OF PHOTOGRAPHY

2013年度 第36回公募

申込期間 4/17[水]－6/12[水]

WEB応募申込システムおよび詳細は、以下をクリック

canon.jp/scsa

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的に1991年にスタートしたキヤノンの文化支援プロジェクトです。この公募は、銀塩・デジタル写真を問わず、サイズ、点数、年齢、国籍など応募制限がなく、自由で独創的な写真表現を応援しています。次世代を切り拓く力強い作品、皆様のチャレンジをお待ちしています。

審査員 ● 敬称略・50音順

大森 克己(写真家) 佐内 正史(写真家)
榎木 野衣(美術批評家) 清水 穰(写真評論家)
ヒロミックス(写真家)

写真新世紀

写真新世紀誌27号
2013年4月1日発行

発行責任者: キヤノン株式会社
渉外本部 CSR推進部 写真新世紀事務局
〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2
tel: 03-5482-3904 fax: 03-5482-5131

Cover photo: 原田 要介「世界するもの」より

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。
©2013 Canon Inc. All rights reserved 非売品

PUB.NCP04 0413GC10 Printed in Japan

Canon



Canon